

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム5

古典を核とした 教養教育の将来



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

第5回シンポジウム

「古典を核とした教養教育の将来」

2004年10月8日(金) 16:30 ~ 19:30
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペースにて

Program

16:30~	教養研究センター所長あいさつ	横山千晶
16:35 ~	シンポジウム趣旨	佐藤 望
16:45 ~	パネリスト発表(各15分程度)	納富信留 チャールズ・ドゥウルフ 小菅隼人 種村和史 武藤浩史
18:00 ~	休憩(10分間)	
18:10 ~	ディスカッションによる質問 &	全体討論 寺澤行忠 西村太良

パネリスト発表要旨

(当日の配付資料より抜粋)

納富 信留

西洋古代にみる「古典学」の理念

「古典を学ぶ」と言うと、古今東西の偉大な作品を読むという意味に解されることが多い。無論、歴史に受け継がれてきた遺産も大切だが、より重要なのは「古典学 classics」が総合学として、広く学問一般の基礎を成していることであろう。現在私たちが拠って立つ人類の文明基盤を「古典」(西洋の場合はギリシア・ラテン)という一つの世界に学び取ることが、「教養」として要求されているのではないか。私自身が英国ケンブリッジ大学で古典学を学んだ経験から、まずこの点を考察したい。

古典学がもつ多様性と総合性は、文化の普遍性を指し示してくれる。その「普遍性」を人間に共通の可能性として徹底的に考察することが、哲学の役割であろう。絶えずギリシア・ローマという「古典」に立ち返りながら自己を作り上げた「西洋」を反省的に捉えることで、それを超越る、開かれた「古典」の可能性を、哲学の立場から探っていきたい。

チャールズ・ドゥウルフ

多文化主義と日本古典研究

工業先進国は、近年はどこでも、一般教養の理想が社会的・イデオロギー的な様々な圧力に曝されている。高等教育は、かつてないほど多くの若者の手が届くところに来ているが、それと共に、これまで伝統的に特権階級と結びつけられてきた(正しくか誤ってかは別として)古典学習の類ではなくて、市場に出せる技術を提供せよという圧力も強まっている。欧米、特にアメリカでは、「人文科学の教育はこれまで、白人男性のキリスト教異性愛者の視点で定義されてきたが、そのような『暴虐』は、もっと広い基盤に立つ相対主義的な多文化主義に取って代われねばならない」と主張するのが流行になってきた。

その結果は破滅的だった。若者はこれまで以上に学校に留まり、これまで以上に経済的な負担が増し、これまで以下の成績しか上げられなくなった。得をしたのは圧倒的に教育産業 偽左翼の教授連と高度に政治的な官僚達である。

しかし皮肉なことに思わぬ拾い物もある。アメリカの大多数の学生は、アキレスをブラッド・ピットとしてしか知らないが、ほんの一握りの古典学者はこれまでのどの世代よりも、自らの分野の微妙なひだにまで深く分け入って学んでいる。同時に多文化主義ブームのお蔭で、日本も含めた非西欧世界への関心が高まった。今日では、これまでにならぬほど多くの学生が、平安時代の文学も含め、前近代の日本について勉強している。私自身は人生のあまり早くはない時期にこの分野に「さまよい込み」、単なる道楽者としてうろろしているのだが、比較文化的な見地から私の考えていることをお話ししたいと思う。

小菅 隼人

「古典」の性格と役割について

価値概念および形式概念としての「古典」については、すでによく知られ、言及されるところである。むしろ、重要なのは、「古典」の性格規定であるように思われる。T. S. Eliotは、“What is a Classic ?”の中で、「古典作家は文明の成熟した時代、言語、文学の成熟した時代にのみ成立する。それは、成熟した精神の産物でなければならない」と述べ、Maturity（成熟性）をその最重要な要素としてあげている。そして、その成熟性は、彼の中では、Form（形式）の尊重でもあった。エリオットに触れつつ、Formに対する我々の誤解が、今日の古典軽視を生み出していることを主張する。さらに、このことを踏まえて、現代において古典を学ぶ事の意味を考えたいと思う。すなわち、思考と表現におけるFormを学ぶことの意味は(1)普遍的な共通基盤を持つこと(2)不変的価値を学ぶことにありと私は考えるからである。この点について、私の担当している日吉共通科目「文学」を例に古典教育の意義を説明し、併せて、古典教育での、教養研究センターの果たすべき役割について触れたいと思う。

種村 和史

中国古典教育と「漢文」

日吉の総合教育科目の中で、中国の古典に関する教育は「漢文」が担当しているが、「漢文」は、本来は古典中国語を日本独特の方法によって読解する力を養成することを目的とした、言ってみれば語学の授業に似た性質を持つ科目である。それが「古典教育」を担っているというのは、他の国（文明？）の「古典教育」とは状況が少しく異なっている、これは異常なのか？正常なのか？ということを見端として、次のようなことを考えたい。

1. 原文によらない、翻訳による「中国古典」の授業は可能か。
2. 読解訓練＝スキル教育のための全体的な見直しをもった一連のカリキュラムをどう実現するか。
3. 実用を第一目的にしない鑑賞力向上を重視したスキル教育は、現在の大学教育の中で受け入れられる余地があるのか。
4. 伝統的に読解力習得と鑑賞能力の向上とを両立させようとしてきた漢文教育の教育方法論は今なお学ぶべき点があるのではないだろうか。

武藤 浩史

古典の「捏造」、古典の「創造」

第一次世界大戦後に本格的に始まったイギリスの英文学研究における「古典」の歴史を簡単に述べて、「古典」形成には時代・社会の要請を受けて「捏造」される外在的要素が大きく関与するという事を明らかにした上で、「古典」の普遍的価値を自明なものとしてそこにいわれなく寄りかかる立場に反対することを表明し、教養教育にとっての「古典」は現場すなわち教室の授業における教員と学生間の創造的なやり取りから生まれるべきものであることを示す。教育の現場から新たに慶應義塾日吉の古典を作ってゆくことを教員の一人一人が意識すべきであり、それをまた自らの研究と繋げて授業に生かすとともに、積極的に外にその成果を発信してゆくことの大切さを述べる。「古典」テキストを体感するとともにそのコンテキストを分析する力をつけることで教養「古典」教育が持ちうる大きな可能性を指摘する。最後に、この文脈における私の拙い（かつアヤシゲな？）試みである自称「チャタレープロジェクト」を紹介したい。

はじめに

大学教養研究センター所長 横山千晶

2004年10月より、羽田功前所長に替わりまして、教養研究センターの所長となりました、横山千晶と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、本日のシンポジウムのタイトルともなっております「古典」という言葉について考えてみたいと思います。古典とは「人類の知の遺産」です。しかし、古典が遺産として現在まで受け継がれてきたのは、古典が常に新しいものであったからだと言うこともできるでしょう。つまり、それぞれの時代の人々に受け入れられ、時代とともに成長し、私どものもとへと伝わってきたもの。それが古典ではないでしょうか。その意味で、古典は常に生まれ変わるという必要性も帯びております。

ここで、私の研究テーマでもある19世紀イギリスの工芸家、ウィリアム・モリスの言葉を引かせてください。



横山千晶所長

すべての模様には何らかの意味がなくてはなりません。確かにその意味とは、私たちの過去の伝統から来たものであって、私たち自身の生み出したものではないかもしれません。しかし私たちはその伝統的な意味をしっかりと理解しなくてはならないのです。さもなくば、私たちはそれを受け入れることもできなければ、次世代へと受け継いでいくこともできないでしょう。ただ模倣するだけでは、それも伝統ではありません。変化こそは命の証です。

モリスのこの言葉は、そのままいまの時代のあるべき古典の姿をあらわしているのではないのでしょうか。いつの時代でも、古典は生まれつつあります。その新しい発見の目を育て、新たな知の遺産を生み出していくことは、私たちの使命でもあります。つまり、過去から受け継がれた富を単にそのまま受け渡すだけでなく、そこに新たな知を付け加えて次世代へ渡していく。それこそが、古典教育の真の意義ではないのでしょうか。

古典を学ぶということ、そして古典を教えるということは、時代、宗教、社会、国を超えた人間の叡智を共に知ることであり、同時に人間とは何かということと共に考えることです。そして、教養教育こそがその担い手となると、私どもは固く信じております。本日はそういった古典の重要性を、それぞれの立場から認識していらっしゃる皆さんにお集まりいただきました。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

「古典を核とした教養教育の将来」

司会	佐藤 望	本塾商学部助教授
パネリスト	納富信留	本塾文学部助教授
	チャールズ・ドゥウルフ	本塾理工学部教授
	小菅隼人	本塾理工学部助教授
	種村和史	本塾商学部助教授
	武藤浩史	本塾法学部教授
ディスカッサント	寺澤行忠	本塾経済学部教授
	西村太良	本塾文学部長 / 文学研究科委員長

古典と教養

佐藤望(司会) 教養研究センターでは、このところ「 を核とした教養教育」というテーマのもとでシンポジウムを続けております。今回は、「古典」をテーマにすることにいたしました。

私は、商学部で音楽を担当しております。ドイツのバロック音楽を中心に理論などの研究をしているため、古典という言葉と遠くない研究ということで、今回コーディネーターを仰せつかりました。まず最初に、今回のシンポジウムの意図や目的について、コーディネーターとして私なりに考えたところをお話したいと思います。そして、それを出発点として、皆さんに論議していただきたいと思っております。

現代の教養の在り方を問うことが、教養教育センターの大事な目的です。私は「教養」と「古典」というふたつという言葉は、切っても切り離せない大事な関係にあると思っております。

古典の原語となった英語のクラシックス [classics] あるいはドイツ語のクラシーク [Klassik] は、ラテン語の “classicus” という言葉から派生しています。しかし、私が研究対象としているドイツの古典音楽の古い理論書などを読んでみると、少なくとも 17 世紀以前の音楽関係の理論書のなかでは、“classicus” という言葉は、現代のような意味では使われていません。現代の「古典」という意味ではなく、「一級の」「優れた」「高度の」「規範となるべき」というような意味でしか使われていないのです。ドイツ音楽の分野で言えば、“Klassik” または “klassisch” という言葉が非常に多用されてくるのは、19 世紀の音楽評論の中です。それが、徐々に歴史意識

が増加してきたこともあり、「歴史的な一時代を築いてきた一級の作品」というような意味でこれらの言葉が使われるようになってきます。実は、優れた規範となるような作品を形容する “klassisch” という言葉と、ほとんど重なる意味で、“romantisch” という言葉も使われていました。古典の言語となった “Klassik” もしくは “classic” という言葉の意味の変化については、音楽だけでなく、ほかの芸術作品や文学作品についても同様なのではないかと思えます。

ドイツの 19 世紀といえば、いわゆる教養市民と呼ばれる階層の人々が台頭する時代でもあります。彼らは社会をある程度支配する富裕層で、共通のアイデンティティとして、文学や芸術の分野に関し一定の教養をもっている、あるいはもつべきだと考えていた人々でありました。現代の日本において、“Klassik” という言葉が、古典と訳されて、古典とは過去の偉大な書物や芸術作品を意味し、これについての知識をもっていることが、教養人としての証である、という考えが、一般的に存在し、それが明治時代の日本にも日本の知識人たちの移入され、古いテキストを表す「古典」という言葉が訳語としてあてがわれました。ここから、かつての大学生やあるいは旧制高等学校に見られたような典型的な教養意識と、古典に関する意識が日本でもある時期までは見られたのではないかと考えられます。

これが、私のパースペクティブから見た古典観です。古典に関する知識とそれに基づく教養という話は、後ほどドゥウルフ先生が詳しく話してくださるので、そちらに譲ることにします。古典が意味するものは何か、ということも、今回、パネリストやディスカッサントの皆さんと深く掘り下げていくことができれば良いと思っています。



佐藤 望氏

いずれにしても、現在の大学のなかで古典というものの位置づけが、形を変えていることは間違いありません。今日の社会的な雰囲気の中なかでは、「大学はもっと社会で役立つスキルを教える」という一般の要請や学生の希望が、かなり強いように思えます。たとえば、情報教育やIT教育をやっていくことに関しては、社会的にもかなりの説得力があるように聞こえますし、国際化の時代であるという観点から、すぐに役立つ英語を教えることについてもそうでしょう。しかし、従来の古典教育が教育の中で占める比重が、本当に落ちてしまっているのでしょうか。今日の雰囲気の中なかで、古典教育の意味が小さくなるのでしょうか。これが、私が皆さんに問いかけた、今回のシンポジウムの重要なテーマです。

大学が大学であるためには、何か役立つことを教えるということよりむしろ、人類の知の遺産を継承すること、広い・深い知識と教養を身につけさせることが非常に重要だと思っております。われわれの大学は実学の精神を謳っていますが、学問という人類の叡智の蓄積をもってしか解決できないような現代的困難な問題に、いかに立ち向かえるのか。それが、いまわれわれに突きつけられた大きな課題と挑戦であると思います。さまざまな価値観が交錯する現在、もう一度古典というものを捉え直すことは、大変意味があることだと考えます。

私が最初に考えた出発点は、以上のようなことです。今回のシンポジウム開催にあたっては、古典の概念そのものについてを考えようということで、なるべくいろいろな分野から古典に関わる人においでいただき、古代ギリシャからチャタレー夫人までという多彩な顔ぶれになりました。つまり、ねらいは古典の概念を広いコンテキストから考え直すということ。そのうえで、「古典」人類の叡智の遺産の継承

「教養」の3つのラインを何らかのかたちで結びつけることができないか、皆さんで考えてみたいと思います。

一定普遍的な文化価値ということが言えなくなってしまったように見える現代ですが、横山所長がおっしゃったような意味で、こうしたなかでこそ見直さなければならない古典があるのではないかと考えております。また、こうした問題をともに考えることで、日吉キャンパスのいろいろな広いネットワークの中なかから、新しい義塾の姿を見出しにいけるのではないかと希望もっております。

私がパネリストの皆さんに問いかけた問いは次の4つです。

われわれが継承し、伝えていく教養としての古典というのは何か

それぞれの立場での実践的取り組み

これからの課題と可能性、それを実現するためにはどうすればいいか

慶應義塾の教養教育、特に古典教育に関しての未来像のようなものを語っていただきたい

もちろん、この問題に直接的・間接的に答えてくださると思いますし、あるいは「問いの立て方そのものが違う」というようなご指摘も、あるいはあるかもしれません。そうしたことがディスカッションの中なかで明らかになっていくことこそが、またシンポジウムの醍醐味ではないかと私は考えています。

「西洋古代にみる“古典学”の理念」

納富信留 私の専門は西洋古代哲学で、プラトンやソクラテスを研究しております。

ケンブリッジ大学の古典学部

私は、かつてケンブリッジ大学大学院の古典学部 (Faculty of Classics) に留学しておりました。これは「古典学部」と呼ばれ、日本には存在しない学部です。この経験をもう一度思い出して、ここから日本の今日の古典、教養あるいは教育という問題に対して何か言えることがないか、考えていきたいと思っております。

イギリスだけでなく、西洋で Classics とは、古典というだけでなく、学問としての古典学という意味があり、しかも多くの大学には独立の学部が設けられています。古典学は、基本的にエリートが学ぶ学問であり、古典学を学んだから

とって、すぐに役立つものではありません。しかし、「古典学は人文学の最高峰である」というようにいまでも思われているようで、一番優秀な学生たちが学びに来ます。そして就職がいい。これはイギリスだけでなく、先日お会いしたイタリアの先生もおっしゃっていましたが、古典学部を出た学生は引く手あまたなのだそうです。われわれからすると、ちょっと想像できないのですが、この背景には「基本的なものの考え方を身につけた人は何にでも応用できる」というような考え方がいまでも確固としてあるからではないかと思います。この考え方は残念ながらかつてのように強力ではありませんが、未だに歴然と残っています。

古典学、Classics という学問とは何か。一言で申し上げますと、ギリシア・ローマの研究です。ギリシア・ローマが西洋にとっての古典であり、ギリシア・ローマのことを研究するのが古典学なのです。古典学には、文献学・文学、哲学、歴史学、考古学、美術史、科学史など、われわれがばらばらに捉えているものが、実際にはすべて入っています。要するに、ギリシア・ローマに関係のあるものはすべて、ひとつの学部で机を並べて勉強する。多少領域の壁もありますが、同じ学部で多くの学者や学生がつどって研究する学問なのです。

ヨーロッパの、ある程度以上の教育を受ける人たちは、高校の段階でギリシア語・ラテン語を学びます。大学に入ってから言語はやりません。大学教育は、ギリシア語・ラテン語をすでに習得してきたことを前提にしています。しかし今日ではこうした状況が衰退傾向にあるのは世界中どこでも同じでして、ヨーロッパも例外ではありません。古典語に堪能な学生は少なくなっていて、先生方はみんな嘆いています。そうはいっても、いまでもある程度こうした傾向は残っています。

日本には存在しない教育体制ですし、この環境はわれわれから見ると非常に不思議です。こういった体制が、19世紀以降は大学の核として存在していました。

“古典”の転換

また「古典」という捉え方も、現代では少しずつ変わってきています。最もわかりやすい例は考古学です。私自身がキプロス島での考古学調査隊に加わったときの経験のお話をしましょう。プラトンを読みながら、一方で考古学ができるのも、古典学部ならではです。考古学の変化にはかな



納富信留氏

り目覚ましいものがあります。皆さまがイメージしているのはシュリーマンの発掘やインディ・ジョーンズのような冒険家かもしれません。黄金を掘り出したらすごい、あるいは大きな遺跡が出てきたらすごいという発想は、実は前世紀の遺物でして、そのような考古学をやっている人は現実にはもういません。それには帝国主義的なバックグラウンドがあり、発掘したものを大英博物館など大きな博物館に運んで、戦利品として飾っていました。そうした考古学、あるいは古典という捉え方は、いまでは完全になくなったとは言いませんが、確実に変わってきています。

現在の考古学では、フィールド・サーヴェイ(field survey)と言う作業があります。これは私が実際にキプロスでやったことですが、畑や野原を歩きながら陶器のかげらか何かをただ拾うのです。こういう作業を延々と1カ月ぐらい続けて、そういった遺物の分布をデータに入力していきます。すると、最後に、このあたりの地下にミケーネ時代の村があるはずだ、などという結果が出てくるわけです。要するに、大きな発見ではない、すばらしいものではない、大物が出てくるわけでも、すばらしい美術品が出てくるわけでもないけれども、古代人の生活が実際はどのようなものであったか、あるいは古代人はどのような環境で生きてきたのかということ、全体として復元するというのが、現代の古代考古学のひとつの潮流です。

これは必ずしも考古学だけではなく、実際には古典学全体がそういった方向で動いているのではないかと思います。「偉大な本がすなわち古典であり、それを読む」という古典の考え方から、「古代世界を全体として捉える」という方向に変わってきているのです。つまり、マイナーなものも含めて、文脈、あるいは相互関係を見ることで、古代世界の全体を

捉える。プラトンだけ、ホメロスだけ読んでいけばよいというようなことは、もう完全になくなってきています。

そこで出てくるのが学問という理念です。断片的に最良の部分だけを見れば良いというのではなく、私たちが生きていく生き方の総体を見る、あるいは世界を全体として見るというのが学問の理念です。そして古典学は、それをひとつの形として実現するものであると言えるでしょう。そういった研究や視野のシフトが、この数十年の間に特に顕著に起こってきています。

これが現代に生きている古典学です。皆さまが思いいらっしゃる古典のイメージとずれている部分もあるかもしれませんが、しかし、実際に、最先端の古典学は、古典を常に新しく活かすという意味では、古典についての一番新しい学問と言ってもよいと思います。

なぜ「古典」に還るのか？

では、なぜ「古典」に還る必要があるのか。ヨーロッパの場合には、ギリシア・ローマに還るといのが西洋のアイデンティティの問題だからです。これもやはり多少変化してきていると思いますが、初期の段階では「すばらしい過去の理想の文明があった」「すばらしいプロポーションの人たちがアスレチックをしながら、自由を謳歌していた」というばら色のイメージが17世紀頃までありました。まずはこういった理由で、人々はギリシア・ローマを重視していたわけです。

それが後々変化していきます。なぜギリシア・ローマに戻るのかというと、ギリシア・ローマを起点に置くことによって、「ヨーロッパ」の形を定めることができると考えたからです。つまり本来であれば、オリエントやエジプトなどいろいろな起源があるわけですが、ギリシア・ローマが起源であると考えることによって、ヨーロッパという土台が成立するわけです。ギリシア・ローマ自体が抜きん出てすばらしかったということも、確かにあるでしょうが、それを見るという行為自体が自分たちのいまの在り方を成立させる、こういう教育の基盤としての古典です。

そしてさらにいまでは、「そのような仕方で古代を見ている私たちって一体何だ？」という問いへと移ってきています。「文明を作っている私たちのやっていることとは、一体何なのだろう？」この問い自体がひとつの学問であり、文明の作り方でもあります。そういう意味で言ったら、決してギリシア・ローマが特権的に優れているというわけではなく、そう

いう在り方をしている、あるいはこれまでそうあり続けてきたヨーロッパが、ギリシアに還るといこと自体を反省している段階ではないかということです。もちろんこの態度には批判もさまざまあります。

われわれ日本人の場合は、どう考えるべきでしょうか。これはよく言われていることですが、やはり明治以降、日本人が抱えてきた葛藤は西洋との対決であり、西洋をどう取り込むかという問題です。夏目漱石の例は皆さんご存じの通りでしょう。漱石はイギリスに行って精神病になってしまうのですが、それはラテン文学をやらないでイギリス文学をやろうと思ったため、ある意味ではかわいそうなことだと思いません。その漱石の親しかったケーベル博士という東大の講師を務めた人が、日本に本格的にギリシア語・ラテン語の教育を導入して、私も含めた今日の日本の西洋古典学はここから始まっています。そして現在、日本のなかでは、西洋の古典を研究し教えることがごく普通のこととなっています。

そうしますと、ギリシア・ローマを研究して、これらの古典を読んで教えるということは、むしろ21世紀を生きていく私たちにとって、この世界をどのように捉えていくかというひとつの視点を与えるものでもあります。

古典教育の将来像

最後に、古典教育についての提言ですが、ひとつには、われわれの側が積極的に新しい古典学の理念を作っていかなければならないと考えます。やはり教える側がきちんとした共同研究の体制を作っていけないと、学生たちに最先端の古典を教えることはできないでしょう。そのような意味で、教育と研究はやはり両輪であって、私たち自身が新しい古典学の構築に取り組む必要が何よりも肝心であると思います。

その場合には、さまざまな古典、つまりギリシア・ローマに限らない、インドや中国、イスラムなど、そして古代だけでなく近代など、さまざまな古典世界を見る視点を交換しながら、全体として、人類の普遍性とは何かを考えていくべきだと思えます。そういう営みを続けていけば、教養としての古典を教えるということは、あえて言ってしまうのですが、自然にできると思うのです。古典教育は、私たちが従事している学問の精神を伝えれば、取り立てて別立てでする必要はないのではないか。つまり、最先端の古典に関するわれわれの研究を、わかる限りで伝えていく姿勢が、それ自体立派な

古典教育になるのではないかと考えています。

多文化主義と日本古典研究

チャールズ・ドゥウルフ 理工学部のドゥウルフと申します。私の専門は言語学ですが、数年前から歴史言語学と、素人として日本語学や古典文学を勉強したり、翻訳したりしています。

フランソワーズ・サガン

今日のシンポジウムで何を話そうかと考えているときに、手にした朝日新聞の天声人語(2004年9月27日)に「フランスからいろいろな新しいものが流れてくる時代があった。文学、美術、思想から映画、ファッションまで。1950年代がそんな時代だった」で始まる一文がありました。このコラムのテーマは最近亡くなったフランソワーズ・サガンの生涯でした。

私の頭に浮かんだのは、古典という概念を理解するのに、このような言葉は欠かせない要素ではないかということでした。古典、つまり回顧の目に映る郷愁に包まれた過ぎ去った時代の精神、それが今どんな姿をしているかをはっきり実感したのは、私が学生にこの文を読ませたときでした。驚くにはあたらないかもしれませんが、かれらはフランソワーズ・サガンなど聞いたこともなかったのです。半世紀前のフランス文化。ジャン・ポール・サルトル、アルベール・カミュ、シモーヌ・ド・ビュヴェ、ジュリエット・グレコ、イブ・モンタンも同様に、何の意味もなしません。

天声人語は広く読まれています。作者は限られた読者層に向けていることをはっきり自覚していると、私は思います。実際、日本のエリートジャーナリストは早く退職する傾向があるので、この作者も個人的な記憶のバラ色のメガネではなく、もうひとつのメガネ、古典というわれわれの概念の作り上げるのに力を貸したスノビズムを通して見ているのではないかという気がします。ここでスノビズムを別に軽蔑するつもりはありませんが、サガンが偶像にされようとしていることに少なからぬ皮肉を感じます。

今日の日本の多くの若い作家のように、サガンは倦怠感に自己陶醉し、大胆に道徳を踏み越えることを楽しむ若者の小説で、大衆をくすぐることによって登場しました。ノーベル文学賞を受賞したフランソワ・モーリヤックが彼女の文学

的スタイルを誉め、彼女のことを「ce charmant petiit monstre (この可愛い小悪魔)」と呼んだことは有名です。一方、彼はこのことだけで、彼女の作品を判断することが賢明かどうかという疑問も投げかけました。昨日の小悪魔が今日のわれわれの手本、あるいは少なくともペットとなるのは世の常です。サガンは後にフランス・アカデミーの会員になる資格を与えられようと思いますが、すばらしいことに、これを拒否する良識を持ち合わせていました。サガンはもちろん学者ではありませんでした。もし学者だったら、ポスト・モダニズムの文学の教授になっていたでしょう。ソルボンヌ大学の試験に落ちるかわりに、文学の正統な高みを極め、その概念を軽蔑することに残りの生涯を費やしたでしょう。

欧米、特にアメリカでは、学者の、少なくとも人文学者の世界は、正統なるものを排斥しましたが、その試みの大きな部分は西洋古典の伝統を王座から引きずりおろし、多文化主義にとって替わらせようとするにありました。しかし実際には、文化を最低の共通要素というまでもなく、教授の気まぐれのレベルにおとめただけでした。

日本人学生の教養

日本では、一般教養の概念やその実現を危うくしているのは、イデオロギーではなく、むしろよく知られた文化的な風習である「建前」です。仕えているものはふたつあります。ひとつは、建前を反映し、根付かせている受験産業。もうひとつは、残念なことに慶應も含めた一流大学などが抱いている、平均的な受験生がもつべき知識というものについての、極めて非現実的で思い上がった考えです。入学試験は



チャールズ・ドゥウルフ氏

学生がもっている無理なく期待できる知識を計るようには、奏功されておらず、大学同士が競争しあい、予備校産業に感銘を与えることを狙いとしています。英語の入試問題から判断すると、何も知らないイギリス人やアメリカ人は、日本の学生は膨大な単語とすばらしい文法の知識をもっていると思うかもしれません。そうでないことは、皆が知っています。

英語圏の文化について、彼らが知っているわずかなことは、既成の教育を通してではなく、ロックやテレビやハリウッド映画を通して得たものです。私は英米文学専門の3年生を教えたことがあります、彼らはアングロサクソン文学が古事記より古いことを知らず、シェイクスピアがおよそどの時代に生きていたかを聞くと、それもわかりません。1000年前ですか？ 1500年前ですか？ それもわかりません。読んだわけではありません。T.S.エリオットも聞いたこともありません。大学4年生が、たとえば教授の専門のヘンリー・ジェームスについて論文を書かなくてはならないことがあります。すると彼らは、ヘンリー・ジェームスが書いた作品を日本語訳でさえ実際に読むことはしません。学生は批評を読んで書きます。これは非常に悲観的な見方でしょうが、非現実的だとは思いません。どうぞ反論してください。

日本の古典文学と古文教育

日本文学、古典文学について、少し話したいと思います。アメリカでは、ヨーロッパでも、日本古典文学はまだイデオロギーの悪影響を受けてはいないかもしれません。それは非常に嬉しいことです。専門化されていることは確かです。しかし、言語学者チョムスキーもあまり古文に興味がありません。私は大学院生のとき、チョムスキー論の熱心な信者でしたけれど、古文については全然知りませんでした。博士論文を書いたときですね、初めて連体形と終止形の違いがわかるようになりまして、日本に戻ってきて初めて源氏物語などを原文で読もうとしました。そして驚いたのが、古文の教え方のことです。私の学生も、日本で育った私の子どもも、古文が嫌いです。それも受験の悪影響だと思います。

そして、楽観的な結論になるかもしれませんが、もっと内容を重視して、『あさきゆめみし』大和和紀・源氏物語を漫画化した作品を読む学生に原文を読ませればよいと思いますが、そのギャップがあまりにもひどすぎるので、確かに考え直す必要があると思います。

「古典」の性格と役割について

小菅隼人 理工学部の小菅です。私は主として演劇を研究しております。

演劇では古典か現代かというのがいつも問題になります。たとえばギリシャとかローマの演劇を勉強している人に「ギリシャ・ローマの演劇は古典だから」というと、「いやいや、これは現代に通じるものだ」と言われます。それに対して、アメリカのいわゆる現代と言われているテネシー・ウィリアムスのような演劇を勉強している人に対して、「それは現代劇だから」というと、「いや、これはもう現代の古典だ」と言われるというようなことがあります。これはどうしてだろうか？というのをしばしば思います。「古典を核とした教養教育の将来」という問題について、前々から興味がありまして、佐藤さんに声をかけていただき、ここでしゃべらせていただくことになりました。

今日、なぜ「古典」に重きが置かれぬのか？

古典という言葉はどういう意味をもつのかという定義について、『日本大百科全書』の一部を抜粋すると、

要するに、時代や民族や場所などとは無関係に、教養の基礎となり、創作や鑑賞の基準となり、研究や批判に耐えるような創造的な作品、精神的活動の模範となるべき根元的・基礎的な価値をもつ作品が古典とよばれるのである。

というふうに、当たり前といえば当たりのことが書いてあります。

われわれが古典とは何かとまず問うときに、まずひとつ、



小菅隼人氏

「古典というのは価値概念である」あるひとつの価値を表す概念である」ということがあります。たとえば英語で classic というときに、この言葉はある種の基準となるもの、模範となるものであって、これは必ずしも時代性を意味しません。たとえば、いまでも英国の競馬ではクラシックレインというレースがありますし、あるいはゴルフでも クラシックというように、クラシックという言葉はよく使われています。というように、ひとつは価値概念としての意味があります。

成熟(maturity)と形式(form)

もうひとつは、古典には形式概念としての意味があるだろうと言えます。これは演劇史的に言えば、古典主義演劇、ロマン主義演劇、あるいはバロック演劇、近代演劇と分けまますし、日本の古典芸能にも能や歌舞伎などがあります。ただ、昨日つくられた新作能であったり、新作歌舞伎であっても、能や歌舞伎の範疇にある限りは古典として扱われます。これは音楽でも同じです。昨日つくられたものでクラシック音楽の中に入る、という意味では一種の形式概念もあると言えます。

この価値概念、形式概念を表すということは、しかしながら当たり前前のことであって、われわれがむしろここで問わなければいけないのは、古典とはどういう性格をもっているのかということだろうと考えます。その意味では私にとってひとつの手がかりとなりましたのは、T.S.エリオットの“*What is a Classic?*”というエッセイです。これは1944年に書かれたものですが、この中でエリオットは次のように言っています。

古典作家は文明の成熟した時代、言語、文学の成熟した時代にのみ成立する。それは、成熟した精神の産物でなければならぬ。……もし我々が教育のある人間であって、真に成熟しているならば、丁度、我々が出会う他の人間の成熟を認め得るように、ある文学、ある文明の成熟を認め得る。

ここでT.S.エリオットが言っているのは、古典の価値概念でも、形式概念でもなく、古典の性格規定です。つまり、「古典作家は文明の成熟した時代、言語、文学の成熟した時代のみ成立する」ということであり、成熟性は古典のひとつの性格であると言っているわけです。

では、この成熟というのがT.S.エリオットにとって、あるいはわれわれにとって、どういう意味をもつのか。これはT.S.エリオットが別のところで言っています。この成熟とは「精神の成熟」「言語の成熟」、そしてこれによって共通の文体とい

うのができあがる。それが古典の成立なのだと言い、T.S.エリオットは理想的な古典としてウェルギリウスを挙げています。ここで成立する古典こそが成熟性、あるいは後世のモデルになる可能性というものをもちわけですが、もう少し言い換えると、おそらくはT.S.エリオットは「成熟性のなかで生まれる洗練はある種無駄のないフォームによって成立する。それが古典なのだ」と、言っているように私には思えます。ですから、その証拠にT.S.エリオットは、多様性をその基本的な性格とするシェイクスピアは古典ではないとします。そして、イギリス文学の代表的な古典作家はポープであるとするのです。それでは、T.S.エリオットがフォームこそ古典の性格を決定するものだと言っていることを踏まえて、さらにそこをもう少し考えてみたいと思います。

ではフォームとは何かということです。おそらくフォームの対立表現としてはひとつマテリアルがあるでしょう。この場合のフォームは「形相」とよく訳されます。これに対して、マテリアルは「質量」と訳されます。もうひとつの対立としてフォームに対してコンテンツ、つまり、「形式」に対しての「内容」という対立のさせ方があります。今日なぜ古典を学ぶことに重きが置かれなくなってきたかということを見ると、私は、このフォームよりもマテリアルやコンテンツというところに重きが置かれてきた結果ではないかと思えます。そう考えてもいいのではないのでしょうか。

ただもちろん、われわれが、いま現在、フォームに対してのコンテンツというときに、フォームとコンテンツを分けて考えていいのかどうか。あるいはフォームとコンテンツに対して、コンテンツを優先させていいのかどうか。ということはもちろん疑問符がたくさんついていて、これは前回の身体知シンポジウムの際にも次のような引用をひきました。

『身』はまた生命のあるなしにかかわらず、部分としての『肉』を意味し(『身と皮』)。全体として文庫は生命の人間の生きたからだを意味する。『栄養が身につく』という場合の『身』は生理的身体であるが、『教養が身につく』となると、その身はむしろ精神的自己というに近い。逆にいわゆる精神的な状態も、それを真に切実な仕方を感じている時には、『こころ』よりもむしろ『身』をもちいて表現される(『身に沁みる』etc.)。

市川浩著、中村雄二郎編『身体論集成』、岩波現代文庫

この部分を引きまして、身体の身というものがフォームの意味もあるというようなことを申し上げました。

古典を学ぶ意義

ここまでのところで、一応古典というものがフォームを志向するものだというふうには踏まえておきまして、なぜ古典を学ぶことに意義があるのかということにつきまして、私なりに考えてみます。

ひとつはフォームですから、普遍的な共通基盤をもつことによってその利点が出てくるだろう。言い換えれば、ある種の知的なコミュニケーション、知的なネットワークが再創造されるということがあります。ふたつめには、形式を学ぶことによって、何が変わるもので、何が変わらないものなのか、普遍的な価値を学ぶことの利点があります。

それでちょっと恥ずかしいのですが、私が担当している、共通科目「文学」の履修要項の一部を引用します。

ウィリアム・シェイクスピア(1564～1616)の生涯・時代背景を概観した後に、いくつかの劇作品を題材に、最終的にその演劇美としての価値を探る手掛かりを与えることを目的として講義を行います。今日、シェイクスピアの作品は様々な芸術分野にモチーフを提供する一方、英語圏のみならず他の国々の文化にも浸透しつつあります。その意味で、彼の劇作品は文化的背景を異にする人々が芸術・思想を語り合う上での『共通言語』と言えます。同時に、シェイクスピアの作品が400年たった今日でも現代芸術としての力を持っているという事実は彼の作品が比類ない美的価値を持っていることを示しています。したがって、この講義では、基本的な知識を伝達するとともに、シェイクスピアの演劇美としての価値を分析的に考える方法を講じます……(以下略)

小菅隼人『2004年度講義要項』

共通基盤としての古典の意味と普遍的価値を学ぶことの古典ということを書き換えて、こういう履修要項になりました。

古典教育の方法について

古典を仮にこのようにとらえると、では、どう教育したらいいのかということになります。この問題について、私にヒントをくださったのは小泉信三の『読書論』です。

何故このように人は古典を読まないのか。人が意外に名著を知らないということもあろう。しかし一には、古典的名著が人に或る畏怖の念を懐かせ、圧迫を感じさせるからではなからうかと、私はひそかに思うのである。古典として世に許されている名著は、皆何らかの意味において独創的である。そしてこの独走はいずれ著者の強い個性から発する。その強い個性を持った著者は、往々読者を顧慮しない。これがしばしば読者に取りつき憎い厳し

さを感じさせ、人に名著を憚らしめるゆえんではなからうか。

小泉信三『読書論』岩波新書、1950年

この小泉の説が当たっているかどうかはわかりませんが、ただひとつ言えることは、シェイクスピアにしても、ギリシャ・ローマにしてもそうですが、ある種の古典を学生に与えようとするときに、学生のほうではある種の障害を感じるし、われわれにとってもある種の障害を感じることは事実です。そういうある種の障害を感じさせるような作品・作家を、われわれは学生に受け入れられやすいように提供する義務があると思います。

ここで、たとえば、シェイクスピア演劇は、戯曲自体が古典であっても、上演されると、たくさんの観客を集めているという事実に注目しなければなりません。つまり、ある種、現代劇として上演されているわけです。シェイクスピアや歌舞伎や能のように戯曲やスタイルが古いものである場合には、確かに、一般的に言われるような古典です。しかし、われわれは、オリジナルを変えるのではなく、オリジナルを現代感覚に合ったように「上演」する努力が必要なのだと思います。

ですから、先ほどドゥワルフ先生のご指摘にあったように、『あさきゆめみし』と『源氏物語』の関係も、『あさきゆめみし』はおもしろい入門書だとは思いますが、古典ではないと思います。オリジナルを変えるのではなくて、オリジナルを、いわば、われわれが、「アクター」となって、提供することが大切なわけです。

教養研究センターと古典について

最後に教養研究センターと古典についてということで話をまとめたいと思います。

T.S.エリオットが、『*Modern Education and the Classics*』という作品の中で、現代ではふたつの教育の傾向があり、この両方ともが間違っているといっています。ひとつは教育の自由主義的な傾向です。教育は単なる事実の習得ではなく、精神を訓練することだから、教育にとってはどんな科目も同じであり、また学生はその自分の性向に従って最も自分の興味をそそる科目を研究すればいい、考え方を身につければいいんだ、というような考え方がいま教育界にはあるといっています。一方、教育の急進的傾向が出てきた。周囲にある、より身近でより重大なものを教育は教えるべきだ。これはテクノロジーや実学といわれるものを古典に優先して教え

るべきであるという考え方です。エリオットは、これら両方も間違っているが、後者のほうがまだましだと言っています。教育の自由主義的な傾向は、実は教えたいこと、教えられることについての明確な目的がない。それに対して、教育の急進的な傾向のほうがまだましだというわけです。私も同じ意見をもちます。そして、これをいま私たちが取り上げている古典ということと重ね合わせて考えると、おそらく古典というものを教育の急進的な傾向という中に組み入れて、それを体系化してどの位置に置くかということが、われわれに、いま与えられている課題であると思います。

中国古典教育と「漢文」

種村和史 商学部の種村です。日吉の総合教育の中で、中国古典に関する教育は伝統的に「漢文」というコマが担うことになっています。この授業の基本的な内容は、漢文の読解力を養成するための訓練をすることです。つまり、中国語の原文によって書かれた中国の古典を特殊な方法で文語日本語に逐語訳して読解していく力を養うための訓練ということですので、言ってみれば、語学の授業に非常に似た性格をもつ科目です。それが、一方で古典教育、つまり中国古典を読み味わうという教育を担っているというのは、おそらく他の国や地域の古典を学習する科目では例のないことだと思います。どうして中国古典だけがこうなっているのか。これは異常なのか、正常なのかということを発端にして、考えてみたいと思います。

まずお断りしておかなければいけないのですが、私は漢文の授業は一度担当したことがあるだけで、現在の状況についてはあまり詳しく把握しておりません。そのため、この



種村和史氏

場で申し上げることは非常に抽象的になると思いますので、お許しいただきたいと思います。それからもうひとつ、私の専門は中国古典文学ですので、そこに話を絞って考えたいと思います。

翻訳による中国古典の授業は可能か？

どうして漢文 = 中国古典教育という形になっているのか。つまり逆から言えば、漢文を使わない、原文によらない翻訳による中国古典の授業が果たして可能なのかと考えたわけです。おそらく哲学や歴史であれば、現代日本語訳を教材に用いた授業はおそらく可能かもしれませんが、中国古典文学ではおそらく不可能であろうと思います。

たとえば、中国古典文学の代表的なジャンルである漢詩を思い出してください。いまでも書店に並んでいる漢詩全集などを思い出していただければ、原文、書き下し、現代日本語による通釈というふうな三本立てで構成されていることがおわかりになると思います。ここで通釈というのは訳詩ではありませんで、詩の内容を逐語訳的に現代日本語に移し替えたもので、大体内容はこういふことだよということを読者に理解してもらうために載せられているものです。ですから、原文や書き下し文と対照させながら読解の補助として用いるものではありません。そういう原文のもつ言語美を現代日本語を用いて復元するという試みは、ほとんど放棄されています。

詩の翻訳が不可能だというのは当たり前の話ですが、そのなかでも漢詩は突出していると思います。私自身ヨーロッパの詩を翻訳で読んで、そこに内容以外の詩的な美しさに感動をした経験がありますので、詩は翻訳不可能と言っても、なにがしか翻訳可能な部分はあると思います。しかし、いま申し上げましたように、漢詩の翻訳については、われわれ研究者自身がその努力を放棄しているというのが現状だと思います。

以前は、漢詩集で翻訳のみを紹介するという編集方針を採ったものもありますし、漢詩の翻訳論が盛んになった時期もあります。井伏鱒二や佐藤春夫のようにすばらしい漢詩の翻訳を行った人もいますので、他の国と同じように、翻訳を自立させようという動きも確かにあったことはありました。しかし、いまでは、先ほど申し上げたような状況に落ち着いています。

漢詩の特殊性

これはなぜなのかということは、ふたつの面から考えることができると思います。ひとつは漢詩の芸術的な要素のなかで、現代日本語訳で伝えられないものがあまりにも大きいことです。中国文学は何を伝えるかということ、それも大切ですが、どのようにそれを表現するかということに非常に大きな努力を払っている文学です。ですので、その言語表現を捨象して内容だけをうんぬんしてもあまり意味のないことが多いということが、ひとつの原因かと思えます。

もうひとつの理由はより積極的なもので、日本人は漢字に慣れ親しみ、漢文訓読という便利な手段を有していて、原文を見て理解できる能力をもっている。これは漢文教育が衰退してしまったいまの状況でも、なにがしかは言えるので、日本人である大きな武器なのだから、これは利用しない手はないというふうを考えるわけです。ですので、日本人としても持っている潜在能力を用いて、作品の元の姿を提示して、その言語的な美しさを味わってもらふべきだという判断がいまの漢詩集の形に現れていると思います。

逆に言うと、訳によって完全に復元することが不可能な原文の魅力を復元しようと、実りの少ない努力をすることよりも、注釈や解説などにエネルギーを用いたほうが良いというふうを考える。一旦現代語訳にしてしまったときに得られるものがあまりにも少ない。というのが、この漢詩の翻訳を低調にしているひとつの原因だと思いますので、これはこれで正常であり自然なことだと思います。原文の姿を大切にすることが、古典教育では必要だと思っております。

いま、詩集を例に挙げましたが、濃淡の差はあれ、中国古典文学のさまざまなジャンルにおいて、状況は基本的に同じだと思います。先ほど哲学や歴史は翻訳による授業が可能だろうと言いましたが、それは作品から読み取るものを、思想や歴史事実に限った場合、それが可能だということで、それがいかに表現されているかというのを問題にした場合には、やはり翻訳では伝えらるところは限られているのではないかと思います。

ですので、中国古典について言えば、一般学生に向けた教養教育として考えられる最も良心的な目標は、日本人として潜在的にもっている漢文読解能力を開発して、将来自立した読者として、自分の関心や興味にしたがって中国古典に接していけるような下地をつくることだと思います。

慶應が包容力をもち得るか

われわれは、漢文という科目で文法や語彙を教えると同時に、代表的な作品を教材として取り上げて鑑賞するという構成をとって、鑑賞のツボを教えています。感動を教えることはできませんが、感動に到るための道筋や着眼点はありますので、それを名文を通して学ぶことは効果的だと思います。ですので、そういう名文集を教材として用いて、スキルと鑑賞を同時に実現しようという方法は間違っていないと思います。そういうことから、中国古典を漢文が担っているということは正当なことだと思います。

ですので、よりよい古典教育をめざしてすべきことは自ずから明らかになってくると思います。現在、漢文読解能力などの差は学生のなかで非常に大きくなっていますので、そのようなレベルの差に対処していくために、漢文の授業を複数設置したり、漢文をもっと効果的に教えるための工夫をしたり、そこで教えるべき教材をもう一度練り直してみる。そういうことを当然しなければいけないと思います。これらはすべて実務的に解決できることで、われわれ漢文を担当する教員や、関係の先生方が相談して、われわれのエネルギーを考えながら、できるところから少しずつ手をつけていけばいいのではないかと考えています。ですので、現在の中国古典教育の在り方について私は本質的な不満はそれほど持ってはいません。

むしろ重要な問題というのは、慶應義塾全体として、漢文のような授業を受け入れて、存続させていくような包容力をどのようにして維持していくのかということだと思います。

古典教育というのは1年間勉強したからといって、1年間の成果がその場で現れてくるというものではありません。また現れなければならないというものでもないと思います。特に鑑賞ということであれば、それは本質的な事実だと思います。私自身、中国古典に興味をもって専門としているわけで、さまざまな作品を読んできていますが、本当に感動することができた作品はほんのわずかで、その他は理屈としてはなぜおもしろいのかはわかるし、それを論理的に学生に説明することももちろんできますが、本当に身に沁みてもおもしろいなと自分が思うのはほんのわずかだというのは偽らざる事実です。これはおそらく私の人生経験が足りないためであって、いつかその作品がおもしろくなる時期が来るんだろうなと思っています。これは私の問題だけではなくて、古典享受の一般的な在り方だと思います。要は読解と感動

は別のものであって、古典であればあるほど厚い膜のようなものにおおわれていて、それを破るためには時間がかかるのだと思います。

学生の心に種として蒔く

教師がおもしろく魅力を語ったとしても、それを自分自身の目で向き合うときにどう感じるかというのは、別のものだと思います。それは1、2年間勉強したからといって、すぐに結果に結びつくものではない。ですので、下地をつくって、鑑賞のツボを教えて、それを学生の心のなかに種として蒔いておいて、あとはその学生の人生のどの時点かで芽が出るのを待つと。わかったようでわからないままで、とりあえずは嫌いにならないという程度で、漢文から完全に離れていかなないようにする。将来どこかの時点でまた漢文にふれたときに、それまでの経験や知識の蓄積をもって漢文に接することができる。それが漢文の授業を教える存在意義だと思います。

ですので、語学教育に類似しているといっても、漢文は必ずしもその時点での社会的な要請に応えるようなものではありませんし、すぐに積み上げた結果が出るものでもない。ですので、語学教育と教養教育のちよどはざまにある科目だと思うんですが、これが現在の慶應義塾大学のなかでどういうふう存在していくことができるのかということが、私は非常に関心があります。

特にいま、日吉は外国語教育研究センターと教養研究センターというふたつのセンターをもって、それぞれ役割分担をして動いています。それはすばらしいことだと思いますが、その役割分担が行き過ぎた場合には、実用を第一目標としたスキル教育のみをよしとするというになりかねない。また、典型的な教養教育のイメージは、体系性をもって一貫的に構築されたカリキュラムのもとで、知識の積み上げを行い、それぞれの段階で、それぞれの成果が出るというものだと思いますが、そのような目に見えて成果が現れてくる教育とは、漢文教育は質がちがう。こうした、将来のために蓄え、眠らせておくかもしれないような教育の存在意義が認められるのかどうか、私の関心事であり、心配事でもあります。

ですが、こういう将来のために種を蒔いておく、現実的な効用とは無縁の教養を身につけるための教育を提供するということは、慶應義塾大学のような21世紀の先導役を自認する大学、そして非常に優秀な潜在能力をもった学生が集

まる大学では、当然の責務だと思っています。短期的な学習成果や実用的な価値から離れて、学生の人生を豊かにするための教養教育をどのように残していくべきか、存在意義を求めていくべきかということについて、全塾的なコンセンサスを形成すべきではないかと思っています。無用のものは無用なままでおいておくからこそ意義があるのであって、無用のものを有用にしようと思ったら、無用のものになってしまうというのが私の考え方です。

また、このような、言葉の姿に対する感受性を大切に、言語を味わう技術を養うということは、これは中国文学のみならず、古典についても自立した読者を養成するためには必要なことだと推測します。だとすれば、幸いにも漢文というふうな語学とも鑑賞ともつかない授業をわれわれは中国古典教育の場においてもっているわけです。しかし一方で、他の国々の古典教育の現状では、語学教育のなかでは古典作品を読むことが難しくなっているわけで、どうやって読ませるか、読む力をつけさせるかという問題にいかに取り組んでいっしょなのか、それぞれの先生方に私はぜひおうかがいしたいと思います。

古典の「捏造」、古典の「創造」

武藤浩史 皆さん、こんにちは。武藤です。私はイギリス文学を専門にしております。

私の発表のタイトルは、古典の「捏造」、古典の「創造」ということで、少々脅迫的かなとも思いますが、古典というのはふたつの見方があると思うんですね。ひとつは、古典にはおそらく内在的に価値があるという見方。古典テキストには時の試練を経た普遍的価値が内在するという見方です。

一方で、最近の日本文学研究などの本を読みますと、古典の成立には非常に外在的な要素が働いていることが歴史的に証明されているようです。つまり、古典は時代の要請に合わせて、ちょっと強い言い方をすると、「捏造」されるということですね。参考文献として、シラネ・ハルオさんと鈴木登美さんが編集された『創造された古典』(新曜社、1999年)という論文集をあげました。この本では、たとえば戦後になって『太平記』が古典から外れた経緯や、逆に井原西鶴が古典の中に入ってきたプロセスが書かれていて、「古典」文学の内容が歴史の動きとともに変わってゆく有様がまざまざとわかって読んでいくと目から鱗が落ちます。ただ日本文学に関してはそれくらいの知識しかありませんので、専門であ



武藤浩史氏

るイギリスの文学研究のことをお話ししようと思っています。

イギリスの英文学研究事始め

本格的に英文学研究が始まったのは1920年代ですから、まだ100年の歴史もありません。しかし、19世紀から英文学という講座はありますし、さらにさかのぼると、18世紀のスコットランドでは英語・英文学教育が行われていました。英文学教育・研究の歴史を調べてみると、実はそれが時代の要請に合わせて、導入されたことがよくわかります。

18世紀にイングランドとスコットランドが併合されます。その結果、スコットランド人はイングランド文化そして英語文化を導入しなくてはいけなくなります。イングランド文化に適応しなくてはいけないということで、英文学・英語教育、標準的なイングランドの英語を学ぶ動きが起こります。参考文献としては、Robert Crawfordの *Devolving English Literature* (Clarendon, 1992) をご参照ください。CrawfordはスコットランドのSt. Andrews大学の先生ですが、英文学研究の起点をこの18世紀のスコットランドとイングランドの併合に見ています。

また、19世紀のインドに英文学研究の起点を見るという研究もあります。植民地となったインドの人々に、いわゆる古典教育、つまりラテン語・ギリシャ語教育は難しすぎるから、そのかわりにもう少し簡単な疑似古典としてのイギリス文学を教えてイギリス化する、あるいは紳士にする。そういう視点から、インドでは英文学教育がなされていました。労働者階級についても同様ですね。労働者階級には、やはりラテン語・ギリシャ語は難しいので、その代替物として英文学を教えようと。スコットランドやインド、労働者階級という、

イングランドの支配層から見るとマージナルなところにいた人間に手頃な教育を施すという形で、歴史の要請に応じて英文学研究がおこってきたということがわかってと思います。

本格的に英文学が研究されるのは、第一次世界大戦後です。特にケンブリッジ大学で、現代の文学もまじえた英文学専攻コースの教育が本格的に始まります。戦時中の1917年に、これからはきちんと英文学研究をやっていこうという若手の学者たちの動きが出てきます。また、Henry Newboltという作家兼法律家が政府の委嘱で英文学教育・研究に関する委員会をつくり、1921年にNewbolt Reportという報告書を提出しました。彼は、文学の精神性というものを強調しています。「文学は……人間精神の主要な神殿の一つ」と言っています。そこには第一次世界大戦後の混乱したイギリスをどうやって再建するかという問題意識があったのですが、英文学によって混乱したイギリスを立て直そうという時代の要請・圧力・流れがあったわけです。つまり、そこには戦後のイギリスの危機意識があって、その再建のための代替宗教のような文化の柱としてイギリス文学をやっていこうと、現代的な意義を意識してやっていこうという動きですね。

ケンブリッジ学派对オックスフォード学派

これがケンブリッジ学派です。ケンブリッジとオックスフォードではここが大きく異なります。

オックスフォードでも、古い文学を研究する派と新しい文学を研究する派というふたつの異なるグループがありました。それから、文学を言語学的に扱うか、あるいは文学鑑賞を重視するかという対立もありました。結果的に、オックスフォードでは、現代文学を排斥して、古い文学を言語学的観点からやるという派閥が勝ちました。『指輪物語』で有名なトルキンなどはこの派閥に属していて、ですから言語学的な関心から自分で妖精の言葉を創造して、それを作品の中に入れていったわけですね。慶應の英文科の系譜はこの系譜だと思います。Neville Coghillという人がオックスフォードにいましたが、私が慶應で英文学を勉強しているときにこの人の名前をよく耳にしました。

一方、ケンブリッジには、F. R. Leavisというカリスマ教師がいました。小林秀雄のような存在です。この人が現代文学を重視し、また、混乱した、分裂した、機械主義に犯されたイギリス社会を救うための英文学教育を強調して、非常に学生をひきつけました。ケンブリッジでもちょっと異端だった

のですが、彼の教育を通じた影響力は非常に大きなものがありました。ケンブリッジの外側からも、作家の T. S. Eliot がこういう動きを援護していました。

イギリス文学の古典を規定したのは、この Leavis です。彼ははっきり言ったんですね。Jane Austen と George Eliot と Henry James と Joseph Conrad と D. H. Lawrence が偉大な作家たちなのだ。それから、モダニズム文学と言われる中では、T. S. Eliot や James Joyce や Ezra Pound のあたりをそれなりに認めると。その結果、D. H. Lawrence は古典作家になってしまい、私も『チャタレー夫人』の研究者としてここにいるわけです。

教養教育の「古典」創造

日本では、われわれのように、文学研究をしながら、大学の語学教師をしている人が多いと思います。日本でも第二次世界大戦後の混乱のなかで文学への期待が高く、その状況は第一次世界大戦後のイギリスとけっこう近かったんじゃないかと思うんですね。ただここで大切なのは、そういう時代は過ぎたということです。文学が何か時代の混乱から抜け出る道を教えろという過大な幻想はすでになくなって、代わって心理学者や生物学者などが期待を担うようになっている。ですから、その点から古典文学教育にとっては危機の時代であるということは言えると思います。

ただ、私はこの危機の時代をけっこう楽しんでます。それは簡単に言うと、これまでの古典の概念が学生になかなかアピールしないのなら、逆にこれから新しくつくっていけばいいんじゃないか、と開き直ってみるとなかなか楽しいということです。そして、それはどこからつくればいいのかというと、現場からつくればいいでしょう？ 教室からつくればいい。そして、教室で学生との共同作業を行いながら、その面白さを授業を通じて学生に伝えていく。あるいは、その試みから、けっこうおもしろいテーマが見つかるだろうというのが私の実感です。そこからいろいろなテーマを見つけて、それを発信していく。そういう形で、それぞれの教師が努力して、新しい古典をこの日吉からつくっていけばいいのではないか、というのが私の考えることです。

学生には、ふたつのことが必要だと思います。ひとつは感じること、体感すること、感動することです。そうした経験をベースにして、われわれはさらに分析の手助けをしてやればいいのではないかと。つまり体感 + 分析、あるいは体感 + 批

評。そのふたつのことを授業でやりたいと思っています。

それには、新しく古典を創造してゆく作業が非常に効果的ではないかなとも思っています。私が「チャタレープロジェクト（『チャタレー夫人の恋人』の新訳と同時にその解説本を執筆出版する）」という試みを始めた最初のきっかけは、文学の授業で、学生にチャタレー夫人の翻訳を読ませたのですが、つまらないと思うんですね。要は翻訳が古いんです。50年前の翻訳ですから。でも、本当はおもしろい作品なんです。しかし1、2年の授業で、翻訳がつまらなかったらどうしようもない。で、これは自分で翻訳をするしかないなと思いました。自分でいい翻訳をして、そして学生にこれは読んでおもしろいということを体感してもらう。その上で、今度は感じたもらった学生に、自分の感動を分析してもらう。そうすると感動は必ずしも無条件にいいものだけでなく、ファシズム的なものに繋がりが得るやばい感動ということもわかってきます。分析してもらって、これは歴史的に見るとやばいよねなどということも学生に考えてもらおうと思って、つまり、学生により複雑に考えてもらおうと思ひ、感性と分析的知性の両面から学生に現代を生きる力をつけてもらおうと思って、いま、「チャタレープロジェクト」をやっています。

翻訳して、その作品について本を書く。つまり翻訳によって感じてもらって、本を書くことによって考えてもらう。これからはそういう問題意識で、それぞれの教員が試みていけばいいと、私は思っています。それは日吉における研究および研究発信の活性化にも繋がるでしょうから。

「不易流行」と「古今東西にわたる教養」

寺澤行忠 経済学部の寺澤です。ディスカッサントという言葉の意味もよく理解しないまま、うかつに引き受けてしましまして、ややピンとはずれなことになるかもしれませんが、お許しいただきたいと存じます。

「不易」と「流行」のバランス

「古典」というものを考えるに当たりまして、ふたつのキーワードを提示したいと思います。

ひとつは「不易流行」という言葉であります。この言葉は、芭蕉が『奥の細道』の旅の中で悟った文学観を、不易流行の論として説いたもので、専門的にはいろいろと難しい議論もあるのですが、ここでは「不易」は詩の基本である永遠性を、「流行」はその時々の新風の体を指して、共に風雅の誠から出たものであるから、根本においてはひとつだとする、『広辞苑』が説明しているような、一般に広く理解されている意味で話を進めていきたいと思えます。

「古典」というのはまさに「不易」である。時代を超えて変わらない、本質的なものです。長い年月にわたり、多くの時代のさまざまな批判に耐えて、今日まで生命を保ってきたもの、それが「古典」というものです。ですから逆に申しますと、「古典」とは、時を超えて常に新しい生命をもったものだと言ってよいのです。一方、最新の流行というものは、もちろん中には後世に残っていくものもありますが、その多くは数年もすれば古くなって、使いものにならなくなるものです。

ところで、今日における状況はどうでしょうか。時代の先端を追求する「流行」にあまりにも重点がかかりすぎているのではなからうか。「古典」や「不易」の精神があまりにも軽視されてはいないか。日吉も、大学も、国の政策も、あるいは社会全体も、すべてそういう状況にあるのではなからうか、そんなふうに思います。

いわゆる「古典」は、主として人文科学といわれる分野に密接に関わるものです。ところが、近年、この人文科学が非常に軽視される傾向にあることは憂慮されることです。大学におきまして、カリキュラムの改訂が盛んに行われているわけですが、その中で、いままでなら1年間かけて行われた講義が、半年でよいということになったり、あるいは人文科学の科目を取らなくてもすむようになってきております。



寺澤行忠氏

国立大学では、人文科学系の学科に対する予算が大きく減らされていると聞きます。

あらゆる学問は、それぞれに存在意義があって、それぞれに重要であります。なかでも若い人々が人生観や世界観の基礎をつくり、自らのアイデンティティを確立する上では、人文諸学というものはとりわけ重要であります。人文学は、人間の本質と生き方について考える学問です。自分の頭で考えることができる、真に独立自尊の人間であるためには、人文学を学ぶことが不可欠であると言ってよいのです。それはあらゆる学問の基礎であると言ってよい。先端科学の発展にも、人文科学の基礎が必要なのではなからうかと考えます。そのような人文科学が、これほどまでに軽視されるようになったのは、社会にとって、取り返しのつかない損失を招くであろうと危惧しております。

誤解を招かないように申し上げますが、「流行」が悪いと言っているわけではありません。常に新しいものを追求することは、もちろんどんな時代にも大切なことです。問題は、そのバランスにある。現代は「流行」がその関心の大部分を占めていて、「不易」はほとんど無視されているように見受けられます。明らかにこれはバランスを欠いている。このような状況はあるべき姿ではないと考えているのです。

精神的・文化的なバブル

歴史には大きな潮流があります。第二次世界大戦のときには、戦争に向かって突き進んでいく力に、だれも抗することができませんでした。現代にも、それと性格がまったく違いますが、何びとも抗いがたい大きな時代の潮流があるようです。

すなわち、先端の追求こそが未来を切り開く最大の鍵であり、方策であるという考え方です。自分たちは未来を追求するから、過去を学ぶ必要がない、と考える人たちがおります。これはとんでもない錯覚と言うべきでありまして、古きを訪ねて初めて新しきを知ることができるのであって、人類数千年にわたる叡智の蓄積を学んで初めて未来が見えてくるのです。現代だけを学んで、未来を予測することはできないのです。われわれが考えるようなことは、ほとんどすでに先人が考えている。過去を学ばずして、どうして未来が見えるのか。未来を追求するなら、ますます熱心に過去を、人類数千年にわたる叡智の蓄積を学ぶ必要があるだろうと思っております。

日本経済のバブルは1990年代の初めにはじけましたが、比喩的な言い方をしますと、精神的な世界や文化的な世界は、現在もまだバブルの状態にあるのではなからうか、そんなふうに思います。バブルの状態とは、「不易」や古典的な世界を軽視して、「流行」にあまりにも関心が偏りすぎていることを指して、こう言っているわけですが、バブルは必ずはじける時がくる。早晚、時代は行き先を見失って、原点に戻らざるを得なくなるだろうと考えております。

現代の最大の問題は、現在のこうした状況が尋常ではないということになかなか気がついていないことです。慶應義塾もまた、時代の大波に流されているのではないか。これほど時代の大波に流されていて、独立自尊は一体どこへ行ったのか。慶應義塾では、だれもが口を開くと「独立自尊」を言いますが、本当にその意味がわかっているのだろうか。独立自尊は、決して自明なものではない。いまこそ、独立自尊の真の意味を、慶應義塾の関係者は、改めて自らに厳しく問い直してみるべきではないのか、そんなふうに思います。そして、この慶應義塾が真に時代の先覚者たらんと欲するならば、世の中一般に先立って、現在の状況が本来あるべき姿とは違うということに、早く気づくべきだと思います。

古今と東西の両座標軸

古典教育に関するキーワードのふたつ目は、「古今東西にわたる教養」ということです。

明治100年、我が国は懸命に西洋からものを学んでまいりました。特に第二次世界大戦後は、西洋は東洋に対して格段に優れたものとして意識されてきたと思われます。相対的に日本や中国や東洋に関することは軽視されてきた。古

典教育が大切だということまでは認識しても、西洋の古典は大切だけれども、日本や日本を含む東洋の古典はそれほど重要ではないと考える傾向が多分にあったと思われます。

もちろん、西洋の先進文化を学ぶことはきわめて重要です。しかし、自国の文化に無知で、外国の文化だけが理解できるということは、一体あるのでしょうか。一般的に言えば、自国の文化をある程度知っていて初めて、それとの対比の上で、異質の外国の文化というものが理解できるのだと考えます。自国の文化を一定学んで初めて、西洋の文化も理解できる、そういうことだろうと思います。西洋しか学ばないということでは、その西洋もよく理解できないだろうという気がいたします。

そういたしますと、自国の古典、自国の文化をきちんと教えようとしないう現代の状況というものは、外国の文化を理解する上でも、決して好ましいとは言えないだろうと思います。現代は国際化と言われる時代です。国際人という言葉がよく使われますが、自国の文化や歴史について一定の教養を持たない人間を、決して国際人とは言いません。外国に単にあこがれているだけというのでは、外国人からも馬鹿にされるだろうと思います。

いま、自分がどこに立っているか、どちらに向かって進んでいったらいいのか、それを知る上では、古今東西にわたる広い教養の基盤がなければならない。座標軸を自分自身の中に持っていなければならない。すなわち古今の時間軸と東西の空間軸であります。ところが現状は、古今東西のうち、極端に申しますと、今と西しか見ていないから座標軸が取れない。座標軸が取れないから、自分がいまどこに立っているのかよくわからない。自分がどこにいるのかよくわからないから、どちらの方向に進んでいいのかもよくわからない。そういう状況だろうと思います。従いまして、自分自身を見つめ、未来を模索する上でも、もっと東と古に関心の軸を伸ばして、きちんとした座標軸をつくる必要がある。バランスのとれた教養が必要だろうと思います。

いかに古典教育を復権するか

ディスカッサントという役割から質問を致しますなら、先ほどいろいろな方からいろいろな見方をうかがわせていただきまして、非常に啓発される場所がありました。いま私が申し上げましたようなことは、基本的なところは大方のご賛同をいただけるのではなからうかと思っております。

ところが現実の流れを見ますと、たとえば先ほどふれました人文科学のカリキュラムはどんどん縮小されております。そういう傾向をなんとか食い止めたいと思いつつ、ずるずると結局後退を強いられてきた、そういう現状です。いかにしたら古典教育を復権できるか。それを改めて、それぞれのお立場からうかがえればと思います。

いまの学生の視点に立った古典教育とは

西村太良 文学部の西村と申します。私は寺澤先生のようにまとまったお話を準備してございません。いまお聞きしたお話について、質問をまじえながら、感想を述べさせていただきます。

納富さんと多少ちがいますが、私もギリシャ語・ラテン語を教えるのが仕事です。その観点から行きますと、納富さんの発表は手際よくて、15分間で古典学についてこれだけのお話をするのはたいへんなことだと思います。

教養の基盤がない現代における古典の位置づけ

納富さんのお話のなかではいくつかの点が大切だったと思います。ひとつは、古典を研究する学問の在り方が、さまざまな分野を含んだ統合的な学問と言うのでしょうか、狭い枠組みにとらわれずに、全体的な視野に立ってある対象を見直そうとする傾向に変わってきているというご指摘です。これはご存知のように、古典のテキストを純粹に扱うという古典文献学と、いまおっしゃったようなさまざまな分野を含んだ古代学というふたつの大きな流れに、18世紀の半ばぐらいから分かれてきたわけです。かつては古典文献学に主流がありました。それが現在では、もう少し広い視野から古典全体を見よう、あるいはさらに、古典を絶対視するのではなく、オリエントやアジア、あるいは現在の人類学や社会学、考古学の視点を使用しながら、開かれた古典学にしていくという方向性にまで発展してきました。対象をギリシャ・ローマに限らないという点が、現在の古典学がもっているひとつのプラス面なのではないかと思っています。

なぜ日本人がギリシャ・ローマについてやらなくてはいけないのかということについては、いろいろと理屈で説明するのは難しいと思います。これについては最後にふれたいと思います。

ドゥルーフさんの発表は非常におもしろかったんですが、



西村太良氏

納富先生が楽観的でしたのに比べて、ドゥルーフさんは悲観的でしたね。つまり、いろいろなレベルでいろいろな方が共有している認識だと思いますが、教養の基盤自体がすでに失われつつある、あるいは失われてしまっているという状況にあって、古典に果たしてどういう意味があるのだろうか。あるいは古典を教えるということはどういう位置にあるのか。そういうことが問題になってくると思います。

いろいろなレベルの教養がありますから、アレクサンダーとは犬の名前だと思っている人もいれば、いまおっしゃったT. S. エリオットを知らないというレベルもあります。いろいろなレベルのギャップが存在しています。そもそも、教養教育も含めた古典教育は果たして高等教育のなかでやるべきなのかという問題があります。大学に入ってから改めてゼロからだれかが教えなければならないということになりますと、これは量的にいつても、とうていカバーできるものではありません。大学は量を教えるところではないわけですね。ですから、そういう状況にわれわれがあるということをドゥルーフさんがおっしゃったところが重要だと思います。

模範としての古典への反発

小菅さんの発表は根本的な議論で、私は全部理解しているとは言えないかもしれませんが、特に古典の位置づけや意味づけについて、小菅さんが出されたフォームとマテリアル、フォームとコンテンツの対立関係という指摘はおもしろいものでした。

フォームというのは、知的なコミュニケーションのひとつの基盤としての意味をもつわけです。それがあれば、古典もひとつの意味になるというようなご指摘があったと思います。で、私が関心をもちましたのは、小泉信三さんの本に言及さ

れた部分です。これは、やはり非常に教養主義的な、ある意味で時代性を感じさせる文章だと思うんですね。

いまの学生と話しますと、ある意味での公の規範^{カノン}に対する反発を感じます。それから形式的な制約に対する反発。自由がほしい。「みんなが読んでいるから、読まなくてはいけないんだ」というような言い方をしますと、これに対して「私はそうじゃない」と反発します。最近の学生にとっては、個人的な価値や私的な価値が規範や公式性に対して優先するというのが、彼らと話していて感じることです。

そういう学生にとって規範としての古典というのは、あまりありがたいものではない。つまり押しつけられるものであって、しかもそれが膨大な過去の遺産を引きずっているらしい。がんじがらめで、自由がほとんどない、すべてだれかがすでに言っているというような世界なので、若い学生はどうしていいかわからない。あるいは、そういう世界にはあまり近づかないほうが安全だというふうに感じるかもしれません。私もやはり学生時代に、いわゆる古典学に対してはやや距離を置いていました。その理由は、やはり過去の遺産があまりにも膨大で、それを調べるだけでたいへんだし、何を言っても「これはだれかが言っています」と言われてしまいますから、意味がないと思っていました。ただ実際にはそうではないんですね。それぞれの世代にはそれぞれの世代の新しい問題がやはりあります。

もうひとつ、古典のもっているマイナス面についてですが、納富さんは最先端の古典学という言い方をされたと思いますが、古典学自体が最先端かという、これはなかなか難しいところだと思いますね。たとえば現代の学問体系を全体的に考えてみた場合、やはりもっとラディカルな分野、あるいは緊張感をもっている分野があると思います。その部分と古典を比較したときに、スリルや創造性といったところで、どれくらい拮抗することができるかということがあるかと思えます。

道具が先か、内容が先か

種村さんの漢文のお話は、私自身も身につまされるところです。古典や古典語を教える授業をしておりましたので、そこはよくわかります。つまり古典を読む、あるいは古典を教えるということは、古典語を教えることだという前提があります。そして、翻訳でギリシャ・ローマの古典を教えるというのは難しい。だれに聞いてもいやがる仕事なのです。

読む技術や道具を与えてあげて、本人が読みたくなったとき、やる気になったときに、それを使って読めばいいじゃないかと思われるかもしれませんが、いまの学生はそれだけ長い視野をもって、あらかじめ道具を身につけておこうなどということはあまり考えません。将来引退したときに、原語でも読んで優雅に暮らそうなんて考えないんですね。定年になってから、「じゃあ、そろそろ原語でも読んでみようか」というときになると、もう遅い、ということになります。ですから、道具が先か、内容が先かということは、よく考えるべきで、「とりあえず道具を身につけておけば将来役に立ちますよ」ということでは、やはりいまの学生たちにはちょっと無理だと思います。

いま、三田でも「翻訳の世界」というオムニバス授業がありまして、そこで最初にお話したことは、翻訳によって失われる部分と、翻訳によっても伝わる部分があるということです。たとえばいまのお話ですと、漢詩では翻訳で失われる部分が非常に大きいということですから、漢文で読むことが望ましい。ギリシャ語とラテン語を比較してみますと、ラテン語のほうは翻訳によって失われる部分がむしろ重要だと思います。ところがギリシャ語は、かなりの部分、一番大切な要素は、ある程度翻訳によっても伝わり得るのではないかと感じております。

今年春学期に、「文学」という授業で、初めて日吉でギリシャ文学を教えました。そこで十数回で、ソポクレスの『アンティゴネー』という劇を読みました。まったく関心のない学生もいましたが、小テストやレポートを読んでみると、それなりにいろいろと考えている。1年生、2年生が中心ですから、ほとんど予備知識がないわけですが、最初にある程度予備知識を与えて、そのうえに立って、彼らにとっても身近でありうるだろうというような問題を提示しながら読んでいきますと、学生たちはいままで部分部分を切って、それを分析するという読み方をしていませんので、それ作業自体が非常に新鮮だったんじゃないかという気がします。ですから、それがギリシャ文学だったからだということではなくて、彼らにとってまったく未知のテキストとして読むという体験がやはり魅力になるのではないかという気がしました。

テキストの選び方

その意味では、最後の武藤さんのお話では、感じること、体感すること、感動することを学生に求めているとありまし

た。これはご指摘の通りだと思いますね。

その接点をどこに求めたらいいのかということだと思うんです。どこでもいいのかというと、そこである意味での共有が必要になってきます。教える側と教えられる側の共有体験として、あるテキストが介在し、そのテキストを介して、学生は「先生がどうしてこんなところをおもしろいのか」、逆にわれわれは「なぜこんなつまらない部分を学生はおもしろいと思うのか」とお互いに考える。これは非常に新鮮な体験です。それぞれがお互いの見方や考え方を認め合って、そのうえで対象となるテキストを共有している。これがやはり彼らとの接点となると思います。

何を読んでもいいかと言うと、そうではありません。テキストによっては、両者がつまらないと思うテキストがあるかもしれないし、あるいはこっちはおもしろいと思っても学生はつまらない、学生はおもしろいと思ってもこっちはつまらないテキストもあるでしょう。ですから、両方の側で、いろいろな問題性や、創造力、感動が生まれうるようなテキストを見つけなくていけないということです。

ただ教師が授業でいちいち感動していたらたいへんですので、ある程度客観的な見方などを学生に教える必要もあると思います。そのときに注意しなければいけないのは、学生は非常に敏感に、教師がそれに関心をもっているかどうか分かるんですね。同じものを2回読むと、2回目はどうしても新鮮味が欠けてしまいます。ですから2回目当たる授業を受けている学生はあまり関心を示さないかもしれません。ですから、こちらの側もその場で何か新しい発見をしたり、あるいは新しいことを感じ取ったりということと同等の立場で共有することが非常に大事だと思います。

反発にも意義がある

寺澤先生は、古典的教養人のお話でした。学生は、教養を身につけた人と接して初めて、教養ということがわかるんですね。ですから、古典であろうとなんでであろうと、教える側が何らかのモデルを示すことが必要だと思います。そのモデルに対して、反発するか、共感するかは学生の判断です。年齢によっては、「イヤだ！ こうなりたくない！ 私たちがう！」と感じる場合もあると思いますが、ただ少なくとも、そういう存在から刺激を受け、それに対して反応を示すことには意義があると思います。「私は違う！」と思うことで、寺澤先生のおっしゃる「自分のいる位置」であるとか、これから

進む方向といったものをひとつひとつ見つけていくのではないかと思います。

いまの状況として、西欧に偏っているのではないかとのご指摘は、その通りだと思います。東洋といっても広いのですが、日本、あるいは日本文化の中に深く根ざしている中国の教養が失われてしまうのは非常に悲しいことだと思います。

では、大学の段階でそれをどう教え直すかということだと思うんですね。古文は高校からやっていますし、漢文もやっています。それ以外に、国語学専攻ではない学生に対して、日本文学や中国の古典をどういうふうに読ませるのかということだと思います。ドゥウルフさんがご指摘になったように、日本の古典を大学生に教えるというのはなかなか難しいことだと思います。いまさら、細かい文法の説明に終始してしまうと、学生は興味を失います。もっとそれ以上に彼らの関心との接点になりうるようなものをどこかで見つけていかなければいけない。従来の枠組みとは違う知識をもっている学生対象ですので、これは当たり前だろうと思っていることを前提として話をしても、なかなか接点を見いだせません。ただ学生がそれにまったく関心をもたないかということ、そうでもなくて、単に知らないだけだったり、彼らにとっては新鮮だったり、新しい発見になりうることもあります。カリキュラムの問題で、それをある程度制限してしまうことは、非常によくないことだと思います。

ただ、ひとつ気になりましたのは、今回のお話もそうですが、教養教育が非常に騒がれ始めたひとつの背景には、むしろ社会や企業の側から「最近の日本人は教養が欠けている、大学はぜひとも教養教育をしなくてはならない」というような要請があり、それに対して国が教養教育が必要だという方向性を示したということがひとつにはあると思うんですね。そうだとしますと、非常にある意味で偏った教養、ある有用性をもった教養という方向に方向付けられる危険性を含んでいます。そうなると、先ほどの種村先生の無用なものは無用なものにしておくから有用になるという良いご指摘がありました。そうした本来のあるべき姿を忘れてしまいかねません。今後教養教育やカリキュラム、あるいは古典を考えるときに、そのことは決して忘れてはならないのではないかと思います。

古典の復権

武藤 寺澤先生から、古典を復権するにはどうすればいいのかという問題提起がありました。実は私が言っていることは、それと対立するように見えて、対立していないと感じています。復権させるため重要なことは、教室という現場で学生にいかにかえるかということです。どのテキストを選んで、どのように教えるか。こちらが大切だと思うものを、学生はどのように受け止めてくれるのかということ、現場でもんでいけばいいと考えます。そのなかで「この古典は使える」「これはこの時期難しいかな」ということがわかってきますし、あるいはいままで古典と見なされていなかったものが、実は授業ではうまく使えるということもあります。そういう形で、ある種の古典という概念がなくなるのではないけれど、一種のリストラというのが起こるわけです。

私の体験でも、たとえば私は参考文献に「チャタレープロジェクト～職業としてのエログロ学問（『三田文学』79）をあげていますが、これは何かというと、エロというはチャタレーで、グロというのはドラキュラなんですね。私のふたつの研究対象なんです。これを教室でやると、やはり『ドラキュラ』はすごくおもしろいのですが、やはりたかだか大衆小説です。授業ではなかなかうまくいきません。やはり質が高く、かついろいろな問題をもった『チャタレー』のような第一級の芸術作品の方が必ず学生に受けます。私の体験から言って、そのように教室という現場のテストに耐える力が古典にはあるのです。

ですから、そういう意味で、皆さんが現場で古典をもんで、もう一度作り上げていく。いまの時代でも何か欠けているという欲求って、人間には必ずありますよね。それにうまく応えていければ、また新しい古典ができるのではないかと私は思っています。そして私の理想は、「日吉の古典教育は素晴らしい！」と日吉から発信していけることです。ひとりひとりの教師の自覚があれば、それは不可能ではないと私は信じています。

動く教養と無用の教養(Q&A)

佐藤 表面的な見方をすると、種村先生のアプローチと武藤先生のアプローチはかなり違うようです。武藤先生は、教養で教えるべき古典は動く教養だとおっしゃっているよう

ですが、種村先生は、道具を与えて、無用のものを無用のままにおいておくほうがいいということですね。「無用のものとして、そこにあることが重要である」というように聞こえるのですが、それについて種村先生からのコメントをいただけますか？

種村 私はそれほど対立しているとは思っていないんです。私の発言で、道具としての漢文ということに重点を置きすぎたかもしれません。漢文では、道具としてというか、漢文の読解力を身につけるという訓練をしますが、その教材として与えているのはいわゆる名文集なわけですね。ですから読解を学んでいくとともに、代表的な古典の鑑賞をしていくというシステムになっているわけです。いまの語学はどちらかという道具を教えるという形ですが、それと比べると、漢文は非常に対照的です。そこには漢文の教育の特徴があると思います。

ただ、補足しておきたいと思いますが、いま現在、伝統的に名文集と言われているものの多くは、正直に言って、現代人がはじめて漢文に触れるのに適当なテキストとは言えません。古文真宝とか文章規範というものを、私たちがテキストで勉強したわけですが、これは正直に言って現代のわれわれにとってはおもしろいものではありません。そのままの形では学生の興味を引きつけただけでなくて、われわれ教えている側の興味もかきたてないというものです(笑)。ですので、漢文を読む力と、作品にふれるというのを同時に実現するコンセプトは非常に面白いというか、大切だと思いますが、そこで教えるべきことは、それぞれの教員がいろいろと模索をしていかなければいけないと思います。

ですから、そのところはおそらく武藤先生とそれほど変わりはないわけです。数ある中国の古典の中から、自分の目で、学生の興味を引きつけるようなものを組織立てて選んでいって、それを教材として与えることは必要だと思いますが、それは、いま大学の漢文の授業を担当している先生方は皆さん多かれ少なかれやっていらっしゃるのだと思います。ですから、必要だと思うのは、そういう個々の教師の努力の蓄積を集めて、それを全体的に共有していくことができれば、それは非常に素晴らしいことだだと思います。

古典の魅力とおもしろさ

ドゥウルフ 皆さんはご存じでしょうが、英語の歴史は日本語ほど長いものですが、古代英語の文学は英語圏でもよく

知られていません。私は途中でパニックになって、発表を最後まで話すことができませんでした。実は私自身の教育について話すつもりでした。

私がラテン語を習ったのは、高校生のときです。古代英語を初めて習ったのは大学院に入ってからです。それは多分日本人にとって不思議なことですね。日本の歴史を考えてみますと、江戸時代に本居宣長をはじめとする国語学者のおかげで、平安時代の文学がある意味で再発見されました。古代英語の文学の場合はそのような学者はいませんでした。サミュエル・ジョンソンという有名な英文学者がいますが、18世紀に書かれた彼の英語辞典を見ると、言葉の語源が間違っています。ですから、日本のほうが進んでいました。

いまでも古代英語を習う学生は少ないですね。トルキンはがっかりするでしょうが……。ひとつの理由は古代語の難しさです。私は古代ドイツ語では中高ドイツ語を習ったのですが、古代語を習うと、ドイツ語もできるので、簡単だと思ったのですが、そうではありませんでした。むしろ、古代日本語のほうがやさしいかもしれません。私が『ベオウルフ (Beowulf)』を読もうとすると、非常に苦勞します。ですから、原文を楽しめなくても、現代英語訳を読めばいいと思ってしまっわけです。たとえば、私はシェーマス・ヒーニー (Seamus Heaney) の英訳があまり好きではありませんが、仕方ありません。

日本語の場合は、皮肉なことですが、現代日本語とそれほど離れていないからこそできると思うんですね。私は古文の文法が大好きですね。言語学者ですから(笑)。よくできるわけではありませんが、好きです。学生は「それは先生のへんな趣味(笑)と言いますが、大好きです。それだけではなく、たとえば『源氏物語』も『戦争と平和』の倍ぐらい長いんですが、部分的に読んででもいいし、現代日本語訳でもいい。大切な文学ですから、そのすばらしい魅力を重視すればいいと思います。しかしそれも簡単ではありません。私も源氏を初めて読もうとしたときに、「夕顔」を読んで、「え！この人はだれ？」ととまどいました。でもすばらしい。『あさきゆめみし』は売れているでしょう？ ちょっと皮肉ばく言いましたが、日本古典文学のすばらしさを忘れてはいけません。

納富 古典の魅力に関してですが、知識の量が欠けているということが問題にありますが、その前にモチベーション、つまり、どうやってそもそも興味をもってもらおうのかという問題

があると思います。それはわれわれが実際にやってみせるしかないわけです。

われわれが古典をやっているのが、古典はちょっと違う質の魅力をもっているということです。これは種村さんと同じなのですが、たとえばいまはわからない。けれど心に残っていて、何十年後にもう一度味わえるというのも、ひとつの魅力だと思うんですね。古典は繰り返し読める。これは本当の古典的な古典かもしれないけれど、繰り返し読むおもしろさというのは、つまり、いまわかるというレベルじゃないのですよね。むしろ、いまはわからない。だけどおもしろそう。それを魅力という意味にとって考えるべきだと思います。

よく言われる魅力というと、いま見ておもしろいことであり、瞬間的なのです。それで二度は読まない。そうじゃないと思うのですよね。学生に話すと、「二度も読む？ どうしてですか？ 無駄じゃないですか？」と言われるけれど、そんなことはないわけです。その古典の魅力というところがうまく引き出せばいいのではないのでしょうか。

古典に魅力があることは間違いない。われわれの側が、古典の「いま面白いのではない魅力」について語り得ようになったら、受講者数の増加といった意味での爆発的な反響はないかもしれませんが、おそらくうまくいくのではないかと思います。

小菅 いま見ておもしろくないものを、いつ見る気になるのでしょうか？ やはり、何らかの意味で、いま見ておもしろいものとして示さなければだめではないかと思います。

古典の復権という寺澤先生のご質問に対して、教育においては「方法と素材」ということがあると思います。古典の素材を新しい方法で教えなければならないのに、これを、現代の教育では、しばしば取り違えているのではないかと。つまり、非常に新しいものを古い方法で教えてしまう。私は先ほど申し上げた「オリジナルは変えないで、方法は新しくして」というのはそういう意味です。

次に西村先生に対しては、先生はいまの学生は規範に対して反抗的だとおっしゃいましたが、本当にそう思っているだろうか。これはいま言った方法に対する反発であって、素材に対する反発ではないと私は思います。その意味で、われわれは取り違えている可能性がありはしないかと思いました。続けて、先生はそういう学生は規範としての古典は好ましくないと感じ方をしているとおっしゃいました。本当にそうなのだろうか。本当は教師の側がそう思っているのでは

ないだろうかと思いました。

まとめますと、納富先生がおっしゃったこと、あるいは種村先生がおっしゃったことはある種の本質ですが、古典はやはりいつかわかるものではなく、いまおもしろく教えるべきであり、いまおもしろくわからなくてはいけないと思います。そういう努力をしなくてはいけないと、私は思っています。

西村 私が言った「規範としての古典」という意味は、「古典だから」というある既成の枠組みのなかにテキストを位置づ

けることです。それに対して、たとえばかつての「これだけは読まなくてはいけない」という、教養主義的な時代もあったと思いますが、そういうものではありません。そういうものはいまでは通用しなくなっているんですね。

やはり、テキストそのものも持っている魅力や、それに対する既成的ではない読み方や感じ方のアプローチがができるのであれば、かつて古典と言われたものでもあっても、常にそれは新しいと思います。ある学者が言っているように

COLUMN

青い鳥はどこにいるか

寺澤行忠（経済学部）

シンポジウムでは、現代社会がすっかり自信を失って混迷状態にあり、進むべき方向が容易に見出せない状況の中、大学が揺るぎなき指針を示さなければならないのに、その大学まで時流に大きく流されているように見える、これで良いのかという問題提起をした。

未来、未来というが、青い鳥はどこか遠いところにいるのではない。足下にいるのである。「己の立てるところを深く掘れ。そこに必ず泉あらん」 学生時代に会って、以来深く心に刻む言葉である。

「今時の若い者は」と年配者はよく言うが、今時の若者もなかなか頼もしい。医学部の学生M君の発意から生れた「日本文化研究セミナー」も、始めてからそろそろ三年経つ。卒業生と学生がほぼ半数ずつ、合せて二十数名が、土曜日の午後15時に日吉に集まり、研究会を開いている。初めの二年は、私が「百人一首」を講義していたが、その後は、まず卒業生が毎回交替で、それぞれ自分の得意のテーマで研究報告することにした。経済学部の卒業生ながら、近年日本文学に傾倒、専門書を次々に読破しているY氏は、「和泉式部日記」を講じた。元都市銀行財形部長で、学生時代以来奈良を熱愛するT氏は、会津八一の歌を引用しつつ、多数の映像資料を用いて、奈良の仏像の魅力を語った。元日本開発銀行設備投資研究所長で、ドイツ通のT氏は、全員を自宅に招き、「ドイツロマン派の詩と音楽」と題して、CDで音楽を聞き比べつつ、ドイツ語と日本語を比較しながら、ドイツロマン派の詩と音楽を論じた。工学部出身のY氏は、中東の石油掘削の問題を、仏文科出身のIさんは、フランスで紹介されたわが国平安期の女流歌人について、また医学部6年生のM君は、現代の最先

端の医学と医療について、それぞれ熱心に研究成果を報告した。現在は、学生が自分の最も関心のあるテーマについて鋭意調べてきたことを、順番に研究発表している。発表の後のディスカッションとそれに続くティータイムの談笑は、とりわけ楽しいひと時である。

卒業生と教師と学生が一体となって、教え合い、学び合う。まさに、「塾」の原点がここにあるのではないだろうか。卒業生はもとより、学生も、単位にはならないのに、毎週熱心に通ってくる。ここで行われているのは、最も正統的な、古今東西にわたる教養の相互啓発、自己研鑽である。このような学びの輪が広がっていけば、大学はもっと活性化されるに違いない。一方には、正規のカリキュラムの下で、日本の古典文学の講義を熱心に聴講してくれる数百名の学生がいる。現代の若者、なかなか頼もしいと言わねばならない。

ただ、本を読まなくなった現代の学生に注文しなければならないのは、やはりできるだけ本を、とりわけ古典を読むべきだということである。本を読むことによって、思索が深まるのである。相撲を観戦して感動してもむろんよいが、魂の底から揺さぶられるような感動は、多くの場合、書物、それも古典的価値をもつものに触れることで生まれるものであろう。本を読まないことは、思想の貧困をもたらす、ひいては文明の衰退を招く。残念なことに、近年は大学も教師も、学生に本を読むことをあまり説かなくなった。教師自身、忙しすぎて本が読めなくなった、というのが実際のところであろう。現代のもつ、最も本質的な、そしてきわめて深刻な問題である。

こうした問題も含め、真理を探究する大学という世界は、あらゆる問題について自由に議論ができる場でありたい。そうでなければ、大学の真の発展は望めない。異論を排除するようなことがあってはならない。自由闊達な議論が出来るような場と雰囲気をつくることは、大学運営に携わる当事者に課せられた、崇高な責務というべきであろう。



「死者の口を開かせるためにはわれわれの血を注いでやらなければならない」のです。

古典はいろいろなレベルで読めます。翻訳で読む、原文で読む、あるいはひとりで読む、注釈をひもどきながら読む、あるいは他の人と一緒に読む。その場や一緒に読む人、年齢によって、それぞれの読み方があるのはそうだと思います。ただ大学という4年間で、毎年同じものをやると、学生はあきてしまう。そうは言っても、ある程度長いのものですと、1年では読み切れませんから、2、3年やるとなると、それについてくる学生とついてこない学生とがでてきます。つまりある部分だけを読まざるをえないということになる。どこの大学のカリキュラムでも、ある程度の作品を全部読み通すというのは贅沢なことであって、それは授業ではなく自分で読みなさいということになります。

古典学と生きる技術(Q&A)

大谷弘道 納富先生が古典学を学んだ学生の就職がいいというお話をなさいましたが、非常に私はびっくりしました。つまり多くの学生は現実的ですから、就職がいい、社会に密着したことを教えてくれていると言え、集まってくると思

うんですね。古典がうまくいっていないというのは、社会に密着していない教え方をしているからだと思うんです。そういう意味で、古典を素材にして、かついまを生きる技術を養わせることができればいいと思いますが、イギリスの古典学部では具体的にはどんなことをやっているんでしょう？

納富 日本と同じなのか、違うのかということがひとつあると思います。見た目としては、非常に同じようなことをやっているのです。ただ根本的に社会とのつながり方が違うように思います。

これはひとつの例で、あまり拡大解釈するのมどうかと思いますが、イギリスの古代哲学の学者がイギリスの総選挙の前にBBCのラジオで当時の首相だったサッチャー女史の批判の演説をしました。それは決して政治的なイデオロギーの批判ではなくて、サッチャーがフランス革命の何周年かの演説で言った「人権」という概念に関するものでした。その教授は、彼女の使う人権という言葉には誤った解釈が入っている、それは彼女の歴史観がまちがっているからであると、古典学者として批判したのです。私はすごいと思いましたね。専門として古典をやっている人としては、正確な概念を使うという学問的な営みが、現実の政治状況を明瞭に映し出すことを示したわけです。こういうことを学者が見事

にやるという例を、日本ではあまり知りません。政治活動をする人は政治だけ、学問をする人は学問だけです。こういう状況について、われわれ研究している側も考えなくてはならないと思います。ただイギリスの古典学部では、表面的には特に目立ったことはやっていません。就職がよいというのは、そうした古典学部に、そもそも優秀な学生が来ているという側面があるからかもしれません。

小宮英敏 納富先生がおっしゃった古典学は非常に総合的な学問といえますか、古典という文章を読むだけでなく、かなり科学的なこともわかっていなくてはできないと思います。学問体系として非常に総合的なので、卒業後、社会に出て行っても対応できるということもあるのでしょうか。

納富 総合的というのは、もちろんひとりが何でもできるというわけではありません。それはひとつの場でやっているということです。そういうところで培われる教育や学問は、ある種の総合性をもってひとりひとりに反映するのではないのでしょうか。ギリシア・ローマ＝全人的という理念が残っていて、評価されるとしたらそのようなところかなと思います。ただ、個々の学生のレベルがとくにすぐれているというわけではないとしても、理念があることは重要でしょう。理念がなくなると、可能性さえなくなるのではないのでしょうか。

映画や音楽などをアプローチに(Q&A)

小淵昭夫 いかに関典を学問にするか。私の経験ですと、たとえば母親と娘のどろどろした関係については、まずギリシャ悲劇の『エレクトラ』があります。その『エレクトラ』を、フランス文学、アメリカ文学は、時代の要請にしたがって、いかに読み替えるかということをやっているわけですよ。ですから、アメリカのピューリタンにとってのエレクトラとはどんなものなのかとか、ジャン・ジロドゥーやサルトルにとってはどうなのかと、現在まで来ているわけです。というように、ひとつの時代がどのように古典を見てきたかということと、いま現在日本にいる私たちがどう見るかというのを、つなげていけばいいのではないかというのがひとつの意見です。

もうひとつは、古典は必ず映画や音楽、ミュージカル、オペラなどに読み替えられています。『エレクトラ』なら、ホフマンスタールが脚本を書いて、リヒャルト・シュトラウスが音楽をつくって、オペラになっていますよね。学生の場合、そういうところから入っていくと、非常におもしろく感じて、「じゃあ、ギリシャの原作を読んでみようか」という気になるわけ

です。ですから、いきなり古典というと、なかなかアプローチしにくいけれど、そういうオペラや音楽などでそれこそ体感して、感じたところから、さらに言語の世界にさかのぼっていくという道もあるのではないのでしょうか。

佐藤 私は音楽の授業で、学生に歌わせています。学生に何を歌いたいかと聞くと、J-popをやりたいとか言うんですよ。そういうのを一切無視して、17世紀のドイツのものやモテットなどをやらせるんですよ。でも実際に体感すると、必ずこの世界に学生が入ってくるんです。ドイツ語で、精神観もまったく違う世界に。その響きのなかで入ってきます。当初は講義をしてもあまりうまくいかないの、歌わせようと思って始めた試みですが、それで学生との共通の気持ちができるという瞬間があるという喜びを感じたことはあります。

パッケージ化した知の提供を(Q&A)

田上竜也 私はフランス文学が専門ですが、特に西洋の古いテキストを扱っておりますと、基本的にやっていることは文献学でありまして、文献解釈学であるわけです。西洋には聖書解釈以来の長い伝統があり、古典の一語一句を解釈し、注付けする作業が研究の中心になるのですが、一方、各々のテキストの中には間テキストと言いますか、日本で言う本歌取りという形で、ホメロスや聖書などの文学を20世紀の文学が踏まえるなど、知の体系が組み合わさっているわけです。われわれはそれをテキストとして読み、文に注をつけた「スルス(成立源)」を探したりというようなことをごく自然にやって、テキストをゆっくり読むことが古典の研究・勉強だというように考えています。

いまの若い学生はまず本を読まない。スピーディな時代で、一種のマニュアル社会ですよ。そのなかで、とりわけ2年間で日吉を去る学生に対して、いわゆる従来の古典のテキストをゆっくり読んでその意味を味わいましょうとやっていって果たしてよいのかなという疑問は自分のなかにあります。とはいっても、古典的知識は重要です。私が専門にしているフランスは、ヨーロッパのなかでも古典を非常に大事にする国だと思うのですが、一種の知的訓練として、古典的知識を学生の頃から体系的に学んでいって、議論やコミュニケーションをする際には、そうした古典的な教養がぼろぼろ出てくるように教育しています。今日の日本で、われわれとしてやるべきことは、テキストを読むこともひとつですが、一種のパッケージというか、マニュアルという言葉が悪い

ですが、「こういった知の体系があるんだよ」という導きの系をわかりやすく提示してあげる。われわれは、学生に対して何かきっかけを与えてあげるように、いろいろな形で努力すべきではないかと思えます。

西尾修 僕なんかは古典とか簡単に言って、要するに覚えちゃう。「いずれの御時にか……」というように覚えちゃうことが、僕にとっては古典だったと思います。理屈抜きですね。歌を覚えるように覚えちゃう。そのうちに年数がたってきて、何かわかってくるんですね。そしてまた覚え直す。そういうことをしながら親しんでいくということが、ひとつあると思います。ただ、これも神話かもしれないが、漢文なんかも覚えさせられて、でもこれはすごい財産になったと思う。それに比べて戦後教育は、ある時期、考えることばかり重視していましたが、大体ベースになるものが何にもなくて考えることはできないでしょう。

もうひとつは古典の歴史性です。現在、古典と呼ばれているものの成立過程を歴史的に理解するというおもしろさ、楽しさです。

19世紀以降、ヨーロッパなどでは、歴史学を基礎とした文学史のジャンルが非常に発展しました。その結果、中学ではこういったものを学ぶべき、高校ではこれを学ぶべきと、大まかな枠組みがある程度決まっていた時代があったわけです。僕は、フランス文学については「とにかくこれだけは読め」と言われた、いわゆる定評あるいくつかの「フランス文学史」を読んだりして、大体の歴史的流れみたいなものは

わかりましたが、日本文学については、正当な意味では、いまだによくわかりません。何を讀んだらいいのか。おおよその内容がわかるようなもの、あるいはこれだけを読んでおけばいいと教えてくれるようなものがあったらいいと思いますね。

古典と伝統

ドゥワルフ 古典は伝統という概念と関連が深いと思います。先ほど言うのを忘れてましたが、フランソワーズ・サガンの本名はサガンではありません。プルーストの作品から取ったんですね。そして『Bonjour Tristesse(悲しみよ、こんにちは)』というサガンの有名な小説のタイトルは、ポール・エリュアールの詩から取りました。つまり17歳のフランソワーズ・サガンは伝統の意識があったのです。

悲観的に見れば、いまの若い作家は何も知らない。教養のない連中ばかりで、野蛮人でしかないと思うのでは、やはり想像力が足りないような気がします。やはり普遍性があると思います。人間は人間。形が変わっても、本を読まなくても、神話や伝説が残るからこそ、文化はなくなるわけではないと思います。

佐藤 時間が来てしまいました。論議をありがとうございました。

(了)

パネリスト紹介（発言順）

納富 信留（のうとみ のぶる） 本塾文学部助教授

専攻分野：西洋古代哲学・古代ギリシア

ソクラテス、ソフィスト、プラトンを忠心に、「哲学（フィロソフィア）」という知的営為の成立を研究している。ケンブリッジ大学古典学部にてPh.D.取得。著作にThe Unity of Plato's Sophist（ケンブリッジ大学出版局、1999年；日本語版、名古屋大学出版会、2002年）、『プラトン』（NHK出版、2002年）などがある。国際プラトン学会委員として、2010年東京での第9回国際プラトン・シンポジウム開催を準備している。

チャールズ・ドゥウルフ 本塾理工学部教授

専攻分野：対照言語学・日本古代文学

専門は言語学（統語論、歴史言語学）であり、主に言語学とそれと関連している文学における翻訳理論の問題であるが、数年前から翻訳者として活動している。日本の古典文学に深い興味があり、現在『今昔物語』を翻訳している。

小菅 隼人（こすげ はやと） 本塾理工学部助教授

専攻分野：英文学・イギリス16世紀

大学教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）委員長。大学大学院文学研究科英米文学専攻博士課程満期退学。イギリス・ルネサンスを中心とする演劇研究。英語（理工学部）、文学（日吉共通科目）、演劇史・美学特殊・研究会（文学部）などを担当。著書に『腐敗と再生 身体医文化論』（編著、慶應義塾大学出版会、近刊）、『身体医文化論 感覚と欲望』（共著、慶應義塾大学出版会、2002）、『演劇論の現在』（共著、白凰社、1999）、翻訳に、C・イネス『アヴァンギャルド・シアター』（共訳、テアトロ、1997）シェイクスピア「ハムレット」（『ベスト・ブレイズ』、白凰社、2000所収）などがある。

種村 和史（たねむら かずふみ） 本塾商学部助教授

専攻分野：中国古典文学・詩経解釈学史

慶應義塾大学文学部中国文学専攻卒業。1993年文学研究科中国文学専攻後期博士課程満期退学。専門領域は、清朝考証学、宋代詩経学史。経学（儒教の経典研究）の学問方法の発展の歴史を分析して、中国人の学問観と古典観がどのような変遷を遂げてきたかを調べている。刊行書に『宋詩選注』1、2（共訳、2004、平凡社東洋文庫）、論文「欧陽脩『詩本義』の揺籃としての『毛詩正義』」（宋代詩文研究会『橄欖』第9号、2000）。

武藤 浩史（むとう ひろし） 本塾法学部教授

専攻分野：英文学・イギリス近代

Ph.D. (University of Warwick)。著書・論文に、『チャタレー夫人のディープな世界（仮題）』（近刊予定、筑摩書房）、D.H.ロレンス『チャタレー夫人の恋人』（翻訳、筑摩書房）、『運動+（反）成長 身体医文化論』（共編著、慶應義塾大学出版会）、『ロレンス文学鑑賞事典』（共編著、彩流社）、‘The “Disembodied Voice” in Fin-de-siècle British Literature: Its Genealogy and Significances’（博士論文）。

ディスカッサント紹介

西村 太良 (にしむら たろう) 本塾文学部長

専攻分野：西洋古典学・現代ギリシア語

1949年東京生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。1975年同大学院文学研究科修士課程修了。同文学部専任講師、助教授を経て1996年教授、2001年より文学部長、文学研究科委員長。1978年～1983年ギリシア政府給費留学生、1992年～1994年オクスフォード大学訪問研究員。主な業績として、「若さの花の変容 - Pindaros Pyth.IV 158」(= 「西洋精神史における言語観の変遷」2004年)、「ソフォクレス：アンティゴネー」(ギリシア国立劇場公演台本2003年)、「コンスタンティノス・シモニディスの「イーリアス」写本をめぐる諸問題Ⅰ」(= 「西洋精神史における言語観の諸相」2002年)、「aotos Revisited-some aspects of Pindar's vocabulary」(= 「古典古代における語彙と語法」2000年)。

寺澤 行忠 (てらさわ ゆきただ) 本塾経済学部教授

専攻分野：国文学

1969年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程終了。文学博士(慶應義塾大学)。国文学の土台をなす、テキストの問題と取り組んでいる。また、東西比較文化・比較文明の問題にも、大きな関心をもっている。主著『山家集の校本と研究』(1993年、笠間書院)。

司会者紹介

佐藤 望 (さとう のぞみ) 本塾商学部助教授

専攻分野：西洋音楽史

専門領域は、西洋音楽史、特に17～18世紀のドイツの音楽史、音楽理論研究。論文に、鍵盤音楽の演奏習慣や、バロック時代の器楽の諸概念を扱ったものがある。訳書に、D. シューレンバーク著『バッハの鍵盤音楽』(小学館、2001年)などがある。

慶應義塾大学教養研究センター第5回シンポジウム

古典を核とした教養教育の将来

2004年12月15日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111 (代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

©2004 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。